
E.A. イラ.アフター

木国 多夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E・A・イラ・アフター

【Nコード】

N3907Q

【作者名】

木国 多夢

【あらすじ】

E・A・37

小惑星の衝突によって一度地球を追放された人類は、元に戻った地球に降り立っていた。

地球には新しい生命が生まれていたが、西暦の動物とは違う特性を持っていた。

やがてその動物たちの持つ不思議な力が、人間にも宿るようになる。

その不思議な力「魔法」の源「A o」アンノウンオクチニウムを
巡り、戦争を続ける世界。

その戦争の中で唯一の中立国、「アカツキ」のある高等学校で、
平和に暮らしている男がいた。

だが、夏休み中にある事件に巻き込まれ、平和から追放されてし
まう・・・

00 Prologue | History (前書き)

初投稿のルーキー高校生です。
どうぞごひいきに

まだ本文があらすじに追いついてないだど！？

00 Prologue | History

E・A・37 7 / 8 |

俺は七夕が過ぎ、そろそろ防寒着を着出した生意気な中学生を見ながら、退屈な退屈な社会の授業を、それはもう見事にサボっていた。

まあ、窓の外を見ているだけなので、それほど本格的なサボタージユでもないが、とりあえず授業の内容についてはまっつたくと言っているほど聞いてなかった。

時折前に向き直って板書だけ写す。

それが頭の（ずる）賢いやつの上手いやり方である。

と、俺は勝手に決め付けて実行しているが、いままで特に問題が起こっていないが幸いしているだけだろう。

今、社会の授業でやっているのは西暦最後の大事件、通称「ラスト・インパクト」についての様だった。

画面に書いてある言葉の断片と自分の知識記憶から「ラスト・インパクト」のことについて語らせてもらおうとしようか。

それは西暦最後、正確にはA・D・2456 12 / 31のことだ。

人類は当時から約50年後に確実に地球に衝突する小惑星を発見してしまった。

大晦日に不吉な予報をした天文学者たちは、「なぜ今まで気付かなかったのか」とこぞって自分を責めたが、そんな事は裏腹に、人類が生き残るための計画は迅速に進められた。

そうして人類は宇宙に逃げる事を決意したのである。

それからはとにかく巨大なロケットを作っては人類を乗せて飛ばし、また作っては飛ばし……。

そうすると40年で当時100億人を上回っていた人口の約4割

までが地球外に逃れる事が出来た。

だが、時は来ていた。

発見から40年経ち、天文学者は小惑星がいつ衝突するかをすでに割り出していた。

残りわずか4年。

それが地球に残された人類に与えられた時間だった。

わずか4年ではもうロケットを作れても安全圏まで飛び出す事は不可能だった。

そこで連合政府は全人類に謝罪し、こう言った。

「残りの4年間は全ての法を開放するから楽しみなさい」

これが「ラスト・インパクト」の由来の元になっている。

そう、残された彼らは欲望だけで動き始めたのだ。

それはそれは残酷な光景であつたので、今でも地球最後の四年間の写真は一枚も残っていない。

そしてA・D・2499 12/31 小惑星が地球に落下し、瞬間的に残っていた人類の6割が死滅、運のよかったものも1分と経たずに生命を断たれた。

この瞬間の事を「レイトアルマゲドン」と呼ばれている。

そして小惑星の衝突は予想通りも予想通り、地球に大きな変化をもたらした。

そのことから「レイトアルマゲドン」の瞬間に西暦が終わったのだ。

と、今の段階で分かるのはそこまでだ。

なんてこった、板書するだけでも案外理解できるぞ。

これは他の授業でも試してみる他ない！

そう思って、テストまでそうやってきた俺が泣きを見たのは言うまでもない。

00 Prologue | History (後書き)

どうでしたでしょうか？

今回は世界観の説明だけです。

このあとはバトル・アクションもありますよ！

感想いただけたら嬉しいです。

まだプロローグですが

01 D e s t i n y f l u c t u a t i o n

高校一年一学期末のテストも終わり、来週から夏休みに入ろうかという普通はわくわくするような状況下、俺は机に突っ伏していた。

「・・・ねむ」

不意にそんな言葉を吐いてから寝がえりを打つと教室の壁に頭を打ち、強制的に覚醒させられる。

俺は正直こう思うのだよ。

人がずっと起きているのにはそれなりのエネルギーがいる。

それならばずっと寝ていたらすぐく省エネになるじゃないか。動くのは動くのを強制させられたときとか、動かざるを得ない時だけでも充分だろうに・・・。

まあ、本当に正直なところ、それはただの現実逃避であってそれ以外の何物でもないのだが・・・。

「授業終わんねーかな・・・」

教室の前の方を見てみるとなっちゃんがものすごい形相でこちらを見ている。

まあ、なっちゃんだし、いつk

「良くないから授業を受けなさい」

「・・・せんせー、授業中に読心魔法を使うの反則じゃないんですかー？」

「読心魔法なんか使わなくなつて考えてる事が伝わるくらい、今のあんたはだるそうなんだよ！」

「あ、そつすか」と言つて俺はそつぽを向く。

「あ、そつすか。じゃない！ノートだけでもとりなさい！」

個人を注意していいのかよ。授業進んでねーじゃん。

とか思いつつもノートを出して黒板の文字をささーっと写す。

俺、根は「いいこ」ですから。

自分で言つて自分があわれになつてくる・・・。

「じゃあ、あんたのためにもう一度説明するからよく聞いておくよ
うに」

「はい」

この授業は「科学」という教科だ。

「アカツキ」ではこの科目を授業に取り入れ、先端科学と先端魔法学の両方をちゃんと知り、未来を明るくしてやろうとしているのだ。

なぜ科学と魔法学の両方を知つておくと未来が明るくなるのか。

その理由はやはり歴史にある。

それも古くない「レイトアルマゲドン」後の歴史。

歴史について語るのも飽きたので要点だけ説明すると、十数年前まで世界は幾度か戦争をしていたのだ。

その戦争の原因が魔法に対する偏見のせいだと言われているのである。

だから現代っ子は偏見を持たないよう、科学と魔法、両方を学ぶ義務があるのだ。

まあ、それは西暦以前の大人の押しつけであって、俺ら子供は魔法が自然の理に反しているからと言って嫌いになる事はまず無いと言える。

自分もその例外ではない。

そして自分は科学と魔法についてどうとも思えないのだ。
なぜならそれは俺が生まれた時から生活に盛り込まれていたからだ。

前時代的な大人は科学の後から魔法が入ってきて、すごく違和感を感じる人がいるらしいが、俺らは生まれた時からすでにあるため違和感を感じることをすらできない。

「・・・また聞いてない。」

教壇の上からなっちゃんがこちらを睨みつけていた。

「まあまあ、そんなに怒らなくてもいいじゃないですか。試験では単位取れるくらいの点数取ってるんだし」

あ、怒ったかな？

先生が腕に力を込めてこちらにすたすたと歩いてくる。

「ほ、他の生徒の前ですから、暴力とか、あ、あんまり良くないんですけどね・・・も、もう許せません・・・」

「じゃああとでにしません？ちょうど昼休みになりそうですし」

顔のすぐ目の前に迫ったなっちゃんにも見えるように黒板の上の時計を指す。

「あー、もう！今日の授業全然進まなかったじゃない！てかあんたに二度説明するために戻ってるし。どーしてくれんのよー」

「職員室にでも呼びだして説教すればいいじゃないですか。とりあえず授業終わらせないと皆待ちくたびれてるだろ」

お前のせいだろ。と心の内側から聞こえたような気がするが、気のせいと言うことにしておく。

「じゃあ昼休み職員室に来なさい。自分で言っただからちゃんと来なさいよ！」

「へーい」

「じゃあ解散！」

なつちゃんがそう言うのと他の生徒が一斉にため息を漏らし、あるものは教室を出て行き、あるものはその場で弁当箱を開けた。俺はなつちゃんの指示通り職員室に行くべく弁当箱を持って廊下を出た。

「で、俺はなんか罰を食らうんでしょうかー？」

俺は校長室の前の面談スペースに座らされ、なつちゃんと対峙していた。

なつちゃんは一回はあとため息をついて眼鏡を押し上げる。

「今年の夏休み、私の助手として一緒に生活してもらいます。」

「……………はあああ??」

夏休みをこの教員と一緒に？

え、冗談だよな。

「冗談じゃありません。というか冗談であってほしい……。」

「あ、今度は魔法使ったでしょ。」

「これは校長直々の命令ですので、もし受けなかったら最悪退学もありえます。私の退職もあり得るんだから絶対付き合わせるよ。」

ま、マジですか。

こんなことになるくらいならちゃんと授業受けとくべきだったよ。だから皆も人の話はちゃんと聞こうな！

「え、てかマジなの？俺となっちゃんが同居？」

「マジなの。あーもう、さすがに思春期小僧と一緒に緊張するわ。」

ここで説明。

なっちゃんことナナ・ヒメサキは俺のいところである。

父が六人兄弟の一番下で、なっちゃんの母が下から3番目の長女の娘。

それで12歳も歳の離れたいところが成立するわけだ。

昔はよくなっちゃんと旅行に行ったものである。

「昔思い出してんじゃない！」

「え、ダメなの？」

ま、それもそうか。

今の立場は教師と生徒。

やはり昔の様に遊ぶわけにはいかないのだろう。

「ちゃんと課題が出されるの。だからたぶん遊んでる暇は無いと思

うよ。」

「そういつことかい！」

思わず突っ込んでしまった。

「で、その課題だけど・・・まあ、論文の作成の様だね」

「はあ？論文？」

「いや、まあ、高校生だからそんな難しく考えなくていいと思うけど、魔法化学概論に関するレポートだね。いままでにも何回かやってきたでしょ？」

やったはやったが、中学校の話だ。

高校に入ってからそんなレポートを書く機会はなかったと思う。

まあ、思うだけだ。

「実際は高校に入ってから3回はレポート提出してるはず。科学技術のと、世界史のと、魔法物理の3回ね。どれもいい感じだったから今回のも何となくやってればできるんじゃない？」

それはどうだか、と思いつつ構想を練り始める。

「あ、ヒメサキ、ちょっといいか？」

「あ、はい」といってなっちゃんが校長室に入っていく。

持ってきた弁当の蓋を開けて軽く合掌してから中身に手をつけ始めると、なにやら校長室の中から騒がしい声がしてきた。

悪い予感が背中を走るが、中からなっちゃんが駆け寄ってこない

ところから、どうやら俺とは関係してないらしい。

俺が再びご飯に手をつけようとしたら校長室のドアが開いて、なぜかうなだれたなっちゃんが出てきた。

「おいなっちゃんどうした？」

なっちゃんは反応するそぶりは見せずにこちらに戻ってくる。

「ど、」

「ど？」

「夏休みの同居人が増えた・・・」

「・・・は？」

なっちゃんは何を言っているんだろう？

俺ほどのサボリ魔がこの学校にこれ以上いるわけは無いだろうに。

「ルナレア・サクヤ・S・タールです。これから約一カ月と半月ほどお世話になります」

声の主は非常に可愛かった。

綺麗な銀髪が腰に向けて長く伸び、頭の上には花の模様をあしらったカチューシャをつけている。

背はそれほど高くは無いが、高校女子としてはまあちょうどいいんだろうか？たぶん150センチ後半くらいだ。

そしてなにより目を引くのは、その燃えるように真っ赤な瞳だった。

うちの白い制服と彼女の透き通るように白い銀髪の中に一点だけ浮かぶ真っ赤な瞳は俺の眼をくぎ付けにした。

そしてその唇がまた言葉を紡ぐ。

「よろしく」

01 D e s t i n y f l u c t u a t i o n (後書き)

さっさとこんな場面終わらせてバトルシーンを書きたい作者

感想を、感想をよろしくお願いします。

02 Progress

えーと・・・

何？

何が起こった？

「あの、よろしく願います」

ルナレアと名乗った少女が礼儀正しくお辞儀をしてくる。
そしたらこつちもお辞儀を返すしかなくなって、

「よ、よろしく」と少しだけ頭を下げておく。

「ルナレアさんはなんで私と一緒に夏休みを過ごすことになったのかな？」

なつちゃんが恐る恐るといった感じで話しかけてみる。

「あ、私の事はルナって呼んで下さい。質問に答えますと、それは私が問題児だからです。としか答えられません」

「はあ、そうですか」

はあ、問題児ですか。

いやあんた、問題児じゃなかったらこんな風にされないっての。
なつちゃんが聞いているのはどんな問題児かってことだよ。

「高校に入ってから提出物を一枚も出していません」
「簡単に答えられるじゃないかよ！」

おっと、思わず突っ込みを入れてしまった。

それはともかく・・・
いいのか？

彼女も聞くところ15、6歳のようだ。

そんな男女がひと夏を一緒に過ごして問題なんか起きないのか？
俺は問題を起こす気は全くないわけだが、ま、万が一の事がある
かもしれないじゃないか

そんな事を思っているとふと視線を感じる。

紅い視線はルナの物だとすぐに気がついたのだが、なぜそんな目
で見る。

「あなたが卑猥な事を考えているように感じたからです」

「おま、読心魔法を！？」

俺は思わず椅子から立ち上がり、ルナから少し距離を取る。

「あなたの考えている事は読心魔法を使わなくても分かります」

ちよつと待てい！

さっきなっちゃんも同じような事言ってなかったか？どんだけ分
かりやすいんだよ俺の感情！

「・・・はあ、まあいっか。あれだよ、きっと俺も思春期と言うや
つなんだよ。だから多少の事は気にしないでいてくれ」

「了解しました」

さっきからなんだか他人行儀すぎる言葉遣いに違和感を感じてい
たが、俺が手を差し出すとルナはちゃんとその手を握ってくれた。

「じゃあ二人ともそろそろお昼休みも終わるのでそれぞれの教室に戻りましょう」

「おう」

「了解」

って俺まだ弁当食い終わってないし、ああでも次の授業魔法実習だったような気がする・・・

まあいい、さっさと食っていけばいいだけだ。

思いながら俺は弁当箱の中身を丸のみして、さっさと魔法実習服に着替えた。

「魔法とは「レイトアルマゲドン」の時の小惑星が運んできた新元素、「A o」アンノウンオクチニウム^{ニウム}の性質によって人間の組織の一部が変化した結果得られた力です。「A o」の発する電波のような物の事を力の源^{マナ}と言い、人間がそのマナを受信して、現象化する事を「魔法」と呼びます」

だがマナに対する感受性には個人差がある。

せっかく大量のマナを浴びていても、そのマナを感じられなければ魔法は全く使えない。

そして俺は全く感じられない口である。

「・・・ぶはあ。やっぱ無理だわ」

なっちゃんには力むからいけないんだとも言われたが、これ力
まずにはいられないのだ。

力まずにマナを感じようとすると、単に寒気がしたり、貧血っば
くなって倒れたりする。

「全くどうすればいいのやら・・・」

故に、俺はよく読心魔法をかけられてしまう。
魔法が使えないからそれを防ぐ術もないのだ。

・・・ふう。

まいっか。

「よくは無いと思うのですが」

「・・・ほんとに読心魔法じゃないんだよな」

いつの間にかルナが隣に立っていた。

「魔法が使えないのですか？」

「そうだよ。まあ、正確にはマナを感じられないってとこなんだけ
どな。」

そう、俺はたぶん魔法が使えないわけじゃない。

いやまあ、実質魔法は使えていないわけだが、たぶんマナの供給
さえあれば魔法は使えるんだ。

ところがそれは魔法のできない奴の言い訳として最も一般的なも
のでもあるのだが・・・。

結局マナを感じられないと魔法は使えないわけだしな。

「マナを感じられればいいわけですね？」

「ん？ああ、たぶんな」

俺がいい終わるか否かと言うタイミングで、ルナがいきなり俺の手を取る。

「何をする気だ」

「こうするんです」

ルナがそう言うのと、俺の中に冷たい何かが流れ込んでくる。そう、それはとても冷たかった。

一瞬手を引こうと思ったが、彼女は案外強く俺の手を握っていて放してくれなかった。

「分かりますか？これがマナです。」

「・・・え？」

もしかして今俺の中を流れているこの冷たい感覚がマナ？じゃああの背筋の凍るような感覚やアイスを食べた時みたいにキーンとくる頭痛の様な奴が全部マナを受信している瞬間だったってのか？

「そうです。それがマナです。あなたは勘違いをしていただけなのです」

「そ、そうか」

そういうとルナは手を放し、俺の中には青く冷たい炎のような感覚が残った。

「こっか？」

そういつて手を前に出し、俺のイメージしていた魔法を顕現させようとする。

が、それは意外と難しかった。

「違います。えっと、魔法を発動させるときはマナを外側に向けて放つんです」

「こういう風に」と、ルナは手のひらを上に向けてその上に紅い炎を顕現させた。

相変わらずマナの動きが感じられない俺にとっては、何が何だか分からなかったのだが、とりあえず真似を試みた。

・・・やはり出ない。

するとルナはくすくすと笑い始めて俺の背後に回った。
って俺にかぶさる。

「今度は何をやる気なんだよ」

「こっです」

ルナは俺の右手に自分の手を添えて、俺の体からマナを絞り出すようにする。

すると俺の手のひらに力が集まって行くのが分かる。

その一連の動作になるほどと思いつつ、俺は炎を思い浮かべる。

「うわっ！！」

「きゃあー！！」

すると手のひらで爆発的に青い炎が起こったのだ。
おもわずそれから逃げ出そうと後ろを向いて逃げようとする。

「あっ」

気付いた時にはもう遅い。

俺はルナを押し倒し、俺は倒れたルナの足に引っ掛かって倒れてしまった。

「やべっ。今どくから」

「・・・むきゅう」

あ、こいつ目を回してる。

こりゃ本格的にヤバいかもしれん。

どかなければと思ったがしかし、無防備なルナに目を奪われた。
それはもう、綺麗な銀髪が倒れたせいで乱れたところにもものすごくエロスを感じたりして、大変だった。

だが・・・

自制心を保たなければっ！

その自制心で俺はルナから体を無理やり剥がすと、さっきのマナのイメージを練習し始める。

「あなた、そういえば名前を聞いてないわ。それと、見たところ「A○」の影響を最大限に受けているように見えるのに、そうも魔法を使い慣れていないのはなぜ？」

上半身だけ起こして髪を直しながら俺に話しかけてくる。

髪と言えば、俺の髪もだいぶ色が変なのだ。
マナはそういう変化も体に与えるのだ。

「そうだなあ。いままで魔法を使う機会が少なかったんじゃないの？」

「今重要なのは名前の方。」

あ、そっちが聞きたいのね。

「別に隠してるわけでもないんだがな。俺の名前はアスカ・ヒメサキだ。まあ、よろしく。」

そう言っ て俺はルナに手を差し伸べた。

02 Progress (後書き)

なかなかバトルが書けない・・・。

いいし、この次は無理やりバトルにしてやるし！

感想お待ちしております。

03 Alchemy (前書き)

今日は余力あるっぽいのも一つ。

03 Alchemy

俺の通う高校はさっきも言ったように魔法と科学について学ぶ機会を極力多くしたところで、カリキュラム的にもほぼ半分が魔法学の理論、実習、科学技術の基礎知識に割り当てられている。

次にそれらの学習に最も必要とされる国語、数学、英語、独語等も多くなっているため、実際の時間割で言うと通常高校が7時間で下校なのに対し、うちの高校は毎日8時間と他校より1時間は多くなっているのだ。

それで俺たち生徒は8時間目になると眠気と戦うはめになるのだ。これは俺以外も例外ではない。

その眠気と言うのがなかなかにつらい。

白昼夢と言うのを知っているだろうか？

真昼に見る夢ということだが、この場合は非現実的な空間という方が正しい。

まあ、定義なんてどうでもいいんだが・・・

とにかくその白昼夢と言うやつはウトウトしていて、起きなきゃ起きなきゃとなっていると先生に当てられる幻とかを見て、思わず「はい！」とか叫んでしまうのだ。

先生に当てられるような日常的なものならまだいいが、この前、お姉さんが自分から離れていく夢を見ていたらしく、「ねーさーいんー！！」って言いながら起きたやつがいたのは笑えたな。本人は全く笑えないが。

まあ、そんな事があるのでこの白昼夢と言うやつはこの学校で最も恐れられている現象と言ってもいいだろう。

で

なんでこんな話をするかというと、まあ気付いての通り。
俺が今正に白昼夢を見そうな状態にあるからだ。

5時間目にルナを押し倒してしまった事で相当に疲れてしまったのだ、と言い訳しておく。

まあ正直その影響もだいぶ大きいわけである。

なぜって、あんな状況になったら普通、そのあとが気まずすぎて
疲れるだろう！

「はあ」とひとつため息をつく、一回だけ黒板に向き直る力を
得られた。

先端科学の結晶、パワードスーツ、E・A・19 NUSA条約、
国家保有機体数の制限etc

それらのワードから俺の頭の中の一つの事柄が引っ張り出される。
ああ、AAのことか。

あ、AAって言うのは旧ドイツの開発した超万能型のパワードス
ーツで正確には「Angestriebener Anzug」とい
うらしい。

まあ、アカツキ人は発音がよく分からないので「エーエー」とか、
「ダブルエー」とか、ふつうにパワードスーツと言うやつもいる。
まあ、意味はそのままパワードスーツなのだが・・・。

いや、いっぺん乗ってみたいね。

なんせそれを使えば空を飛ぶことだってできるし、重たい岩も軽

がる運べるって言っし。

しかもそれ本体があんまり機械じみていないらしいのだ。

聞く話によると、リクルートスーツのようなものとか、全身タイツのようなものとか、女子スクール水着の様なものまでであると言う。大抵の教科書で紹介されているのは一番最後の女子スクール水着のような形か、またはその前の全身タイツ型のどちらかである。

機械じみていないと言うか、それはもうもはやただの布切れにしか見えないものであるが、その耐久性は実に宇宙戦艦並で、E・A・初期の戦争ではこれを持っているか否かで勝敗も決したと言う。

まあ、昔はそれなりにごつかったようだが……。

今ではA・Aはセキュリティポリスとかみたいな重役くらいにしか扱われていない。

あ、でもA・Aの機能を使った新たなパワードスーツが、すでにだいぶ完成に近いとも聞く。

まあ、今の平和な世の中、それがどこまで必要とされるのか俺には分かんが……。

「そろそろ鐘が鳴るので授業はここまでですね。委員長、号令を」
「起立、礼」

「さーて、レポートどんなの書こうかなーっと」

さあ、いきなり時は飛んで、今は夏休み。
なっちゃんとルナと、休憩時間をすぐ外のビーチで楽しんでいま
す。

「ヘイアスカ、ボールパス！」
「あいよ」

若干テンションの上がったなっちゃんに向けてビーチボールを投
げてやると、勢い余って飛びすぎてしまう。

「あ、わるいわるい！」
「アスカは何に関してもコントロールがあいまいですね」

この前のあの炎の一件以来、何かと俺がミスるところ言ってくる
もんだから困る。

まあ、確かにあの炎の強さはミスったよ。

でもしょうがないじゃん。
まともに魔法使ったのあれが初めてなんだから……。

ちなみにあれ以降、少しずつだが魔法を使えるようになって来て
いる。

「つか、なんでずっと敬語みたいな話し方なんだよ。もう少し砕け
てもいいだろうに」
「ん、じゃあ遠慮なく。とはいっても、まだ日本語に慣れていない
から砕けた言い方も難しいな。」

あ、もしかしてこいつの提出物出せない原因って、日本語が読め

ないから、どれを出したらいいか分からないとか？

ちなみに「アカツキ」の公用語は日本語である。

「そういうこと。だから私に出された課題って言うのは日本語を覚える事」

そういうことか。

どおりで違和感があったわけだ。

勉強できそうなのに提出物出せないなんておかしいしな。

「アス力はなんでこんなことしてるの？」

「・・・あー、俺サボり魔だから」

そう言うところルナはプツツと吹き出してからアハハと笑い声を立てた。

「じゃあアス力は本当に典型的な問題児なんだね。じゃあもしかしてその髪の色も染めてたりするの？」

髪の色・・・ね。残念ながらそれは地毛だ。

ここで俺の容姿について説明しておこうか。

さっきから話題に上がった髪の色はミカンよりやや黄色みのあるオレンジ色をしていて、身長は173センチ、まあ高校男子ならこのくらいはあって普通じゃないかな？それと眼にも色が付いていて、それはほんの少し紺に近い藍色をしている。

「これは地毛。お前もあれだろ？」

「そう、「A O」による体質変化の影響よ」

「まったく、俺は黒髪の方が好きなのになあ・・・」

全く迷惑な話である。

「A O」の発するマナには生命の遺伝子とかに付加を与える効果もあるらしい。

なのでE・A・生まれの人間は若い者ほど西暦以前の所謂「自然」と言っものから離れているのだ。

「アスカー、ボール投げるよー」

向こうでようやくボールを拾ったらしいなっちゃんが、大声を出してこっちにそれを寄こしてきた。

俺はそれを片手でキャッチすると昔の事を懐かしく思い、深呼吸をする。

「アス力、あれ何？」

「・・・・え？」

ルナが指差す方角を見ると、遠くの方に閃光が走った。

「なっちゃん、あれなんだ？」

「たぶん軍の戦闘訓練じゃないですかね？近くに基地もあるし。」
「なるほど。さすが先生。」

俺はその戦闘の光とやらを見て、なんであんなことをしなくちゃいけないのかと思うタイプだ。

戦争なんてここ十数年間一度も起きていないのに、なんであんなことを・・・・。

平和ボケと言うやつなんだろうか？

あいにく俺は平和な世界と言っものしか知らないもので、彼らが何のために訓練しているかが全く分からなかった。

まあ、俺的にはあまり分かりたくもなかった。

03 Alchemy (後書き)

ああ、バトルが、バトルが書きたい。

バトルに飢えている作者です。

主人公とは全く逆ですねww

さっきアクセス数を確認したんですが、順調に伸びているようでした。よかった。。

見て下さった方々は本当にありがとうございます。

ここを直した方がいいんじゃないかとかあればどんどん言うてください。

僕が目指すのは大賞です！

はい。調子乗りましたw

こんな僕ですがこれからもよろしくお願いします。

04 Rolling

不意に海側から風が吹いた。

「わ、寒っ。さすが夏、海の近くにいるとなお寒いな」

「夏なんだから当たり前じゃない」

そりゃそうだが、寒いものは寒い。

寒い時に暑いと言ったって結局のところ何も変わらないしな。

結局は全て気持ちの問題なんだ。

「まあ、昔は逆だったらしいけどねー」

「は？ 逆ってどういう事？」

「あれ？ 二人とも知らないの？ じゃあ教えて差し上げましょう
！」

そう言うとなっちゃんは自分の横の空間を叩いて、そこに自分の
携帯端末から真っ白な画像を投影させる。

白板だ。

「まず、地球の環境は「レイトアルマゲドン」の前後で大きく変化
しています。」

投影された白板の上を指でなぞり、「春 夏 秋 冬」と書く。

「まあ、隕石が落ちたのだから当然と言えば当然ですが……。今の
季節ごとの気温の変化は分かりますよね？」

「まあ、そりゃな。春から徐々に寒くなって、夏が一番寒くなる。
と思ったら秋にはいきなり暑くなって、冬が一番過ごしやすい」

「そうだ」

そう言ってさっきの季節の下に曲線でグラフを書いていく。
気温変化のグラフの縮図の様だ。

「だが昔はほぼ逆なのである！」

「はあ」

「昔の気温の変化はこうでした。あ、昔の日本ですよ」

なっちゃんは色を赤に変えて、さっきのグラフの上からも一つのグラフを上書きする。

「昔は春は暖かく、夏には気温が上昇し、秋は涼しく、冬が今の夏に相当する気温になっていました」

「へー、そうなのかー」

「その他にも地球環境はいろいろと変化しています。たとえば、今の地球表面の海の面積は全体の6割になりますが、昔は7割でした。それは小惑星が衝突したときに、地球の体積が増えたのが影響しています」

「そうだったんですか。先生は物知りなんですね」

「えっへん。と、威張りたいところですが、これは今後の授業でも習います。私も高校の授業で習ったから教えられただけです」

いや、そこは威張つとけば得だったのに……。

なっちゃんは白板の投影されている位置を二度叩いてそれを消した。

「昔のことなんか知ってもなんもかわりやしない。と言っわけで寒い！」

「そろそろ日も落ちてきたし、中に入りませんか？」

「もつと遊びたい」とだだをこねるなっちゃん先生様を無理やり宿舎に連れ戻した時は、すでに日が落ちていた。

俺は宿舎の部屋で一人布団に寝転がり、何を考えるでもなく天井を見ていた。

夏休みが始まって最初の3日はなっちゃんの家泊っていたのだが、なっちゃんは四日目、つまり今日からここに来る事を前から楽しみに計画していたため、せつかくだから俺たちも連れてこられたのだ。

俺とルナも旅行ができるとして普通に喜んだのだが……。

まあ、この待遇は高校生男子としては普通ですよね。

うむ、何も悲しくない。悲しくないぞお。

だが、寒いのに暑いと言っても何も変わらないように、悲しいのに悲しくないとと言っても哀しいだけだった。

不意に扉がこんこんとノックされるのが聞こえた。

「アスカいるー？ ご飯食べに行くよー」

なっちゃんかよ。

とか思いながら「行く行くー」と返事をしてさつと扉をあけに立ち上がる。

ここのご飯は昔からとってもおいしかったのだが、今年は前の料理長が定年退職してしまったためどうなってしまったのだろうか。味が変わってるとなんだかさみしいなあ……

「ヒメサキ先生とアス力は前にも来たことがあるんですか？」

「ん、まあな。中学生になるまでは毎年一回はここに来てたからなあ」

「懐かしがつてるんじゃない！ まだ高校生でしょ！」

そんな話を話終わるころには食堂につき、飯をもらって席につけていた。

飯の味に関しては昔とそんな大差はなかった。

よく考えたらそりゃそうだよな。

だって変ったの料理長だけで、あとの人員はほとんど動いてないんだから。

むしろこれは新しい料理長のセンスがプラスに働いてもっと美味くなってるかも。

「あの」

そう言っただけで切り出したのはルナだった。

「ヒメサキ先生は日中に見たあの戦闘訓練を見てどう思いますか？」

俺は思わずハンバーグを切る手を止めてしまった。

「うーん、そだねー。正直無駄ではないと思うよ。だっていざという時は彼らの手でこの国が守られるのだしね。なんでそんな事を切り出したの？」

「私の国は、A E Uは隣国と紛争ばかりしていて、私の家は国境の近くにあったので、ああいうの全然他人事じゃなかったんです。だからああいうのを見ると嫌気がさして……」

「ふう」とため息をついて俺は食事を再開する。

「なるほどねー。確かにあの周りは紛争多いわ。今ご家族は？」

「今は国境から離れて首都の郊外で暮らしているので安心ですけど」「じゃあいいじゃない。そんなくさい話食堂でしないの。せっかくのご飯なんだからさ」

ルナの家族ね……

まあ、首都が攻撃されるなんて戦争にでもならない限りまず無いだろう。

俺はハンバーグを食べ終わると部屋に戻って明日の準備を始めた。明日は件の基地を見学しに行く事になっているらしいのだ。

準備と言うのは荷物を積めるのではなく、逆に抜くのだ。

万が一危険物を持って入ろうとしたら見学できないらしいからな。

「はあ」

明日の社会科見学のことを考えると鬱でたまらなかった。

ところでだが、「魔物」というものの存在について説明しただろうか？

いや、恐らくしていない。

魔物と言うのは、正確には敵性魔力結晶生命体というのだが、E・

A・の時代に現れた魔法を使う人間に害なす動物の事だ。

それはそれはとってもやっかいで、以前の単なる物理兵器では魔法決壊を破壊できず、どうしても倒せないというものである。

また、そのやっかいなところはもう一つある。

「スクランブル。スクランブル。洋上、距離約3000mに敵性魔力結晶生命体が出現。ただちに迎撃せよ！」

マナが一定の波形を示した時に魔力が結晶化し、それに何らかのショックが与えられる事でそれに生命が宿り、暴走するのだ。

つまり、魔物と言うのは出現が予想できない。

「アスカ、ルナさん。私たちは邪魔になります。建物の中に避難しましょう」

俺もそうするしかないと思い、なっちゃんの後ろを追いかける。

それにしても3キロと言う近さ。大丈夫なんだろうか。

俺はふと後ろを振り返る。

すると海の上にぼつんと浮いている何か光っている物体を視認する事が出来た。

あれが魔物……

それはここからだあまりに遠く、その姿形はまったく分からなかった。

「危ない！」

その言葉に前に向き直るとAAを着て、今まさに出撃しようとし

ている女性がいた。

「わ!」といってその体にぶつかってしまった。

「す、すみません」

俺が謝ろうと再び前を向いた瞬間、女性は体を俺より前に押し出して、3重にシールドを張った。

シールドとは魔法の一つで、魔法物理的な物体を止めるものだと説明しようとしたら、それに紅黒い光がぶつかる。

それはシールドにぶつかりと二つに分かれて俺のすぐ隣の地面を焼き焦がす。

熱線だ。

まだ攻撃は止まない。

そう思った瞬間にパリンと、ガラスが割れるような音がし、シールドの一枚目が割れる。

「く、このままじゃ」

女性はそう言うに残る二つのシールドにありったけの力を込め始める。

だが、努力もむなしく二枚目のシールドが割られる。

その事に動揺しながらも彼女は最後の一枚のシールドにかけるように腕を前へ押し出す。

だが、その瞬間熱線の力がわずかに上がり、最後のシールドが割られた。

「きゃあ!!?」

爆発する様に割れた最後のシールドと一緒に吹き飛ばされた彼女

を俺は受け止めようと両手を開くが、その威力はとても止めきれるものではなく、俺はそのまま建物の壁にぶつかるまで吹き飛ばされてしまった。

「っぐ！」

叩きつけられた衝撃で背中がじんじん痛む。

だが、自分の事よりこの人だ。

「大丈夫ですか？」

「う……ぐぐ……。……ぐ、はあ……はあ……」

「大丈夫ですか？って熱っ！？」

彼女がさつき前に出していた右手が焼けるように、いや、焼けていてとても熱かった。

これでは魔法が使えない。

「や、やられ……。た。……でも、き、君だけでも、守れてよかった。」

そう言って彼女は薄らとその顔に笑みを浮かべる。

「死なないでください。助けられたまんまじゃ俺の気が収まりません」

「はは……。新型が、これ……。じゃ、し、示しが、つかない……。……君、名前は？」

新型？

彼女はそう言いながら自分のAAの胸の辺りにっている紅い球

状の物体に手を伸ばした。

「俺の名前はアスカ・ヒメサキです。」

「アリア、彼、どうかな？……うん、そう、分かった」

何が分かったと言うのだろうか。

アリアと言う人と会話をしているようだが、その球体は無線機なのだろうか？

そう思っていると彼女がその球体をA Aから外した。

「ヒメサキ君、これを」

「……これは？」

「A Aの新型。ここには他にA Aを装備できる者はいないわ。だから、これで、他の人たちを救って。」

ふと、その女性の纏っていたA Aが光となって消えうせる。

それと同時に彼女の意識もどこかに消えてしまった。

「ははは、それってずるくないすか？ 俺は戦争とか、戦うのすごく嫌いなのに、いきなりこんなのってありですか？」

そんな急に言われても、無理だ。

お、俺にはそんな度胸なんかない。

魔物なんかと戦う勇気もなければ立ち向かう度胸もなければ人を守る気力もなければ守れる力だってこれっぽっちも持っていないんだ！

「大丈夫です。」

ふと、心の中にそんな声が聞こえた。

「私です。今あなたの持っている紅い球体です。」

大丈夫です。

あなたはあれに立ち向かえるだけの力を持っている。
今正にその手に持っています。

今ここを守るのはあなただけです。

そして守れるだけの力は私があげられます。

だから、あなたは私の名前を呼ぶだけでいいんです。

だけど、俺が失敗したら皆が傷つくんだ。

そんな責任を背負う覚悟なんて・・・

「いますぐに覚悟を決めなさい。そうでないとあと10秒と経たず
にここは破壊されます。」

9…… 目を上げると再び発行している物体が見えた。

そんなのあんまりだ。

10秒で覚悟を決めろだなんて俺には

8…… できない。

でも今は俺にしかできない。

この人に

7…… は守られただけで、俺は何にも出来ていない。

だからといってこれはずるいでしょう。

だって俺は軍人でも何でもない。

6…… 一高校生なんだから、俺にそんな事……

「Five……」

04 Rolling (後書き)

やっとバトルに持っていけるか！？
でもちよつと強引にやりすぎたかもしれませんね……

今回はこの間いただいた感想で指摘された部分を極力直してみました。

どうでしょうかね？ww

引き続き感想お待ちしています。

05 Enhancing (前書き)

なかなか納得いく文が書けなかったので更新遅くなっちゃいました。
すいません><

05 Enhancing

Enhancing

[illegible]

叫ぶと目の前に、俺の声に応えるかのように魔術陣が円形に大きく広がっていく。

それは巨大な力を持って熱線とぶつかった。

「大丈夫だ！いける！」

熱線は魔術陣にぶつかるとその中心に囚われていき、巨大な火球に成り果てた。

「お返しだ！！放て！」

魔術陣と言うリフレクターは、火球を中心に抑えたまま魔物へと飛び出していく。

それは傍から見ると俺が火球を生み出して反撃しているように見えるが、そうではない。

この魔術は対象を一度取り込み、そのエネルギーを好きなように転換する魔術だ。

だが、俺はその魔術で電気エネルギーを発生させるわけではない。その魔術の戦闘での使い方はリフレクト、つまり反射だ。

火球は惜しくも魔物の背中をかすって空にて散った。

「けど、初心者にはなかなかですよ」

俺の中でアリアがぱちぱちと手を叩く。

だが、俺はそれをほとんど無視して、そこから飛び立ち、追撃を開始する。

俺が基地から離れると、案の定魔物の攻撃は俺の方に集中してきていた。

そいつの熱線をひよいひよいとかわし、接近していく。

「エネルギー残量に注意して！」

アリアからの注意を受け、視線を声のした方に落とすと、視界の隅に円形のゲージがあるのが見えた。

真ん中には数字、それは俺が見た瞬間03:13:45を示している、俺が見ている間にも一番右の部分がカウントしている。

「それはエネルギー残量からの予測稼働可能時間を示しています。今赤色をしている円形のゲージがエネルギー残量です」

アリアの説明を受けて、とりあえずあと3分しか動けない事を理解する。

「アリア、武器あるか？」

「なんなりと」

「じゃあなるべく威力の高い剣を出せ！」

「It consented.」了解の意を示すと、俺の右手に光が集まり、ひと振りの刀が握らされた。

武器があるからと言ってうまく扱えるわけではない。

だが、素手で戦うのよりはだいぶましだ。

「5秒後に最大加速、いけるか？」

魔物の口が開き、光が放たれるのをよけながらゲージを確認する。
残り02:45:15

「信用して下さい」

「信用する！……………っ！！？」

最大加速の予想以上の速さに一瞬押されながら、刀を腹の横に構える。

そしてみるみる近づく魔物の体表に若干怖じ気づきながらもそれを前に突き出す。

「うつりゃああああ！！！」

刀はいともたやすく魔物の表面を突き刺し、俺は表面にめり込んだ。

そう思うと体は闇に沈んでいき、数秒してまた光にあふれた世界を見た。

貫通したのだ。

最大加速で突きを繰り出した俺は弾丸のようにこの魔物の体を貫いたのだ。

「やったか！？」

「いえ、魔物はそれを構成するコアを壊さない限り消えません」

アリアのその言葉に振り返ると、そこにはすでに今開けられた大

穴を修復し終えてこちらに向き直ったヤツがいた。

「コアって魔法結晶の事か」

「位置を表示しています。赤く点滅しているのがコアです」

それは意外にも鼻の先、つまりさつきから熱線を繰り出しているところだった。

「敵攻撃態勢に入りました」

「まずい、この角度で撃たれたら施設が……」

言いながら残量を見る。

残り54：03：22

絶望的な数字に俺は歯を食いしばり、決断した。

「アリア、もう一回最大加速。同時に最大出力でリフレクタ展開」

「一か八かですね」

そうだ。

最大加速をしたただけで残り2分はあったはずのエネルギー残量が1分になってしまったのだ。

しかもさらにリフレクタを最大で張ろうとしているのだ。途中でエネルギーが切れてもおかしくない。

「よしいけ！」

その声と同時に魔物の熱線は放射され、俺は最大出力でそれを受け止めながら、最大出力で加速する。

エネルギー残量が目まぐるしく下がっていく。
だが、状況は五分と五分、どちらも一步も譲っていない。

「こ、このままじゃ！」

アリアの悲痛な声に顔をゆがめる。

だが、引くわけにはいかない。

俺は皆を守ると決めてこれを着たのだから！

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

この右腕に一世一代の力を込めて、俺はもう一步を踏み出す。

ピーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！

無機質なアラームが鳴り、エネルギー切れを告げる表示が目の前に現れた。

それとほぼ同時に、魔物は熱線を途切れさせた。

ここぞとばかりに、俺は反射魔術に解除の魔法を撃ちこんだ。

なんてことはない。

つい最近やったばかりの発火魔法だ。

導線に火をつけ終わると俺は力尽きたように海上に落ちていく。

発火魔法はリフレクタの中心に成形された火球にふと触れると大爆発を起こし、その爆発に魔物のコアも至近距離で巻き込まれた。

俺は鼻先が完全に破壊されたのだけ確認すると、目を閉じて静かに落ちて行った。

守るために俺は戦った。
そして、死んだのか？

まあ、人の役に立って死ねるならそれは本望なのかもしれない。
いや、違うな。

俺はそんなこと微塵も望んじやいない。

死ぬのなんてごめんだ。

蘇生魔法なんてのもあるけど、俺にはそれをかけられるほどの財力
を持った親はいないし、それはまんま死だ。

死んだらどこに行くのかは結局分かっていないが、楽になれるなん
て事はまず無い、と俺は思っていたはずだ。

だったら俺は自分がやりたい事をやって、それから死にたい。
他人のために死ぬなんてごめんだ。

でも俺がやりたい事をやって、結果的に他人の役に立つのならば、
それはすごく素敵な事だと思う。
だから俺はこれからも皆を守りたい。

お、目標が一つできたじゃん。
他人を守る。

ぷぷ、こうして見るとすごく子供っぽいし、すごくおおざっぱだな。

だけど俺は

それがいいことだと信じる。

少なくとも悪い事ではないと思う。
立派な目標だ。

ならまず

死んではダメだ。

すぐにでも起きて、みんなを安心させなきゃ。

それが今現在の俺の使命だ。

05 Enhancing (後書き)

バトル・・・？

まあ、戦闘シーンを書いてよかったと思います。

上手くできたでしょうか？

前回無理やり戦闘に持っていこうとしちゃったから、うまくまとまらなくて更新遅れました。

送れてまとまったかと言うと疑問ですが・・・。

その辺についても感想お願いします！

06 Misunderstanding

「あ、やっと目を覚ましてくれたね」

俺が目を開いて最初に見つけたのは意外にもなっちゃんやルナではなく、名も知らぬアリアの持ち主さんだった。

でも、彼女はあの時死んでなかったっけ？

「私の名前はメイ・S・アズマ。あなたにMEを使用させた女です。その際はどうもありがとうございます」

彼女がそういいながら深々と礼をするので、俺はそれに合わせて上体を起こした。

そういえば彼女は熱線にやられて手に大火傷を負っていたはず……。

その傷はきつと俺より重症なはずなのになぜ？

そう思って彼女の膝の上に置かれた手を見てみると、その両手は包帯を薄く巻いてあるだけであつた。

あんなもので大丈夫なのだろうか。

「ああ、手……。手の事は心配ないよ。特殊魔法による治療があれば火傷も2、3時間で直るから」

「そうなんですか……」

さすが現代魔法、と言ったところか……

良かった、この人、メイさんも無事で。

「あの」

俺はそうやって話を切り出した。

「俺ってこの後どうなるんでしょうか？」

「……多分、強制的に国家軍の戦力にされるね。なんせ今のご時世、いつどこで戦争が起きても不思議じゃないんだから」

「戦争には参加しません」

メイは微笑すると、少し考え込んでしまった。

だが、俺はそれだけは譲る気はしない。

「俺は、俺の大切な人を守るためにあれを使っただけです。だから、人殺しなんてしません」

ばん！とメイの拳が強くベッドに叩きつけられる。

その拳はベッドを波打たせて、俺に強い振動を与えた。

「アス力君。守るために戦うって言ったね。そう。君は確かにそう言った。それはいい覚悟だけど、君の考えているほどそれは甘くはない。守るために戦う、そんなの、軍に入ってる人なら誰でもそうなんだよ。まさか軍人が他人を殺すために戦っているとは思ったの？」

「……い、いえ。別にそういうわけじゃ」

どんどんベッドに乗り込んでくるメイに押されてアス力は逆に後ろに下がる。

「少し考えてみて、君の大切な人を襲うのはこの前は魔物だったけ

ど、次は違う国の本当に赤の他人なのかもしれない。そんなとき、君ならどうするの？ 人は殺したくないから戦わないの？ そうじゃないでしょ。攻めてくる人たちも死に物狂いなんだから、戦わずに難を逃れるなんて無理なんだよ。だから、あなたの覚悟は足りないわ」

「……あ、ああ」

覚悟が足りない。

自分では十分覚悟しているつもりだった。

大切な人たちのためなら自分は死にかけても戦っていいとすら思ってたはずだった。

だが、そこには相手が抜けていた。

戦うと言う事は魔物なり人間なりが敵と言う形で存在しているのだ。

だがアスカはまだそれに気付けていない。

「ちょっと押し付けたくせに厳しい事言ったかもね。だけど、今のあなたの覚悟では、この先絶対に詰まるときが来る。……私がそうだったから」

ぼそりと最後に付けたされた言葉はアスカの耳には届かない。

「じゃあ、どうすればいいんですか？ 俺は今さっきまでその覚悟で戦うつもりだったんですよ」

「言葉で教えられる事じゃないわ」

ルルルル、と内線が呼びだし音をけたたましく鳴らせた。メイはそれにいち早く反応し、それに手を伸ばす。

「はい。はい。分かりました」

受話器を壁に戻すとメイはすつと立ち上がり、コートを羽織り始める。

「フロントから、君の連れが見舞いに来たって。……アスカ君のことは多分後日上層部で話し合われた結果、私か他の誰かが迎えに行くと思うから、そう思っというて」

「あ、はい」

「その時までには覚悟を決めておくこと」

俺が返事をしないままメイさんは部屋を後にする。

それとほぼ入れ替わりになっちゃんとルナが入ってきた。

「アスカ、大丈夫？」

おっと、あんまりシリアスばっかでもつまんないよな！

ここはとりあえず、気分を入れ替えていこう！

「おう、体の方はもうびんぴんしてるぞ！」

「よかった。私の書く書類が少なくなる」

「そこかよ！」

なっちゃんは口に手を当ててくすぐすと悪戯っぱく笑う。

そのあとふうとため息をついていきなり真面目な顔になると、ベッドに乗り出して俺の頭をなでる。

「AAを使っちゃった時はどうなるかと思ったけど、無事でよかった」

たよ」

「んなつ！？ 辞めろよ、子供じゃあるまいに」

猫みたいな声を出してなでられ続けている俺をみてルナがぷつと吹き出した。

「so niedlich」

「ちょ、おま、ルナ、今何て言った。日本語に訳しやがれ！」

「さんざん心配させたお返しだよーだ。」

べー、と舌を出すルナに一瞬戸惑いながら俺はとりあえず頭をなでる手を下させる。

「意外と元気そうで良かった。本当に」

「おい、泣くなよ？ 泣かれると俺がめっちゃ困るんだからな」

「いや、普通に泣かないでしょ」

「え！？ それはそれでひどい……」

とか、お互いに冗談を交わしながら話しているとさっきまでのシリアスな展開が嘘みたいだなと思えてくる。

「じゃあ、ここで授業を一つ」

「えええ！？」

なつちゃんは壁をこんこんと叩き、白板オブジェクトをそこに顕現させる。

「さすが公共施設、オブジェクト化が早いですね。と、ここで質問。この白板は何でできているでしょう？」

「ん？ さあ」

いきなりの質問ではあったが、じっさいそれも知らない。

「これは実は原料はそこら辺にある電子なんです。これの仕組みと
言うのは、まあ、私も良く分かりませんが次元転移だそうです。空
間に重力を発生させて空間にある電子を強制的に形にするのだとか
……。それとこのオブジェクト化する機能、まあ一般的に言う「リ
アライズ」ですが、これは実は西暦以前の技術なんです。開発当初
は莫大なエネルギーを必要としたためこんな贅沢な使い方はできま
せんでしたが、近年魔法学も進んできて、エネルギー問題は解決し
ました。具体的には約20年くらい前ですね」

いきなり「リアライズ」について語りだしたなっちゃんの勢いは
止まらない。

俺とルナは顔を見合わせて一緒にため息をつくとそれを端末にメ
モリ始めた。

結局俺は目覚めたその日のうちに退院する事が出来た。

眠っていたのは約1日で、その日はもう帰るだけになっていたん
だがな。

それにしてもなっちゃんには悪い事をしたと思っている。

せっかく休養に来たのにこれでは全く休んだ気がしないだろう。

「まあ、別にいいよ」

となっちゃんは言うけれども、バスの中を見ても彼女が一番疲れているように見えた。

「ところでルナはちゃんと休めたか？」

「……うん、まあね。誰かさんのせいでドキドキしたけどね」

あ、はい。

俺ですね。すいません。

「というか、アスカの方が逆に休んでるんじゃない？」

「そうですよ。1日くらい眠ってたわけだし」

「え？ いや、そうでもないぜ。夢の中ではずっと考え事してたからな！」

「あ、そう」と二人に言われてしまう。

やっぱり機嫌悪いですよね二人とも。

「はあ」と、別の事でも悩みの絶えない俺だった……。

06 Misunderstanding (後書き)

はい。

シリアス死んでるーww

やっぱりああいうシーンって書きづらいなあ。
なんというか

自分が鬱になってしまう

さて、どうでしたでしょうか？

なんだか説明口調になってしまっているのがあれですが、楽しんでいただけたでしょうか？

感想を待っています。

旅行先から帰ってから二日目、俺とルナはそれぞれレポートと勉強に集中していた。

夏休みはまだあるというのになぜこんなことをやり始めたかと言うと……。

まあ、なんてことはない。
暇だったんだ。

午前中はどうか寝て過ごしたが、さすがに1日中寝るのは無理なもので……（つい最近1日寝たため？）

午後からなっちゃんの手伝いでもしようかと思ったのだが。

「手伝いなら要らないから、自分の課題を済ませちゃったら？」

と言われてしまい、他にすることもなかったのでそうってしまったのだ。

他にすることがないと言うのは、ここに来るにあたってゲームなどの遊べる機械等を置いていかされたからである。

まあ、あつたってこれは一日持たないような気もするが……。

「ルナー、勉強はかどってるー？」

俺はついに集中力が切れて、後ろ隣の机で課題をやっているルナに質問を投げかけてみた。

ルナはいつも勉強するときには眼鏡をかけるようで、今も赤縁のス

タイリツシユな眼鏡をかけている。

ちなみにいつからかと聞いてみたら……

『これは伊達眼鏡です！！』

ビシツという音が聞こえそうぐらいに胸を張ってそう言われた時には、俺は大口を開ける事しかできなかった。

「ルーナー？」

ルナはその伊達眼鏡をかけている間は外界の情報をほとんどシャットすると言う。

つまり、今は超集中しているということだ。

「はいはい。分かりましたよ」

自分の事をやればいいんですよ。

それにしても魔法化学の論文と言うのはどういうものを書けばいいのやら……

自分の得意分野ではないために、もうさっぱりだった。

魔法物理は得意で、というかなんまり好きで。

この前のリフレクタという魔術も俺が魔法物理について独学した結果、予備知識として知っていた術式だ。

ちなみに、この世界の魔法と魔術の違いは、それを使う時に術式を使うか否かである。

魔法と言うのはマナを感じとって、イメージを具現化する。といった感じだが。

魔術と言つのは、科学の理論式と同じ様に、数字ではなく特殊な言語や魔法陣を使って式を作り、それをマナを使って現象化させるものである。

魔法物理と言つのはだいたい、魔術を使つてのエネルギー転換についてを学ぶことであつたりする。

魔法化学というのは、魔術を使つて物体を変質させる……、要するに錬金術を学ぶ学問である。

魔法物理つてのは普段の生活でも目にするようなものを転換させるから分かりやすいんだけど……、物体干渉とかベクトル操作とか錬金術つてのは転換のさせ方が分からないんだよなあ。

たとえば教科書には初心者にもできる錬金術がいくつか書いてある。

酸化還元反応とか、炭素結合とか。

最後の方には水素をヘリウムに変えるなんてのがある。ちなみに核融合ではない。

だけど、そんな目にも見えないレベルのモノが、どういう風にすればくつついたりするかなんて全く分からない。

教科書にはなにやら難しそうな事が書いてあるが、意味は全く分からなかった。

「アス力、課題終わった？」

ふと話しかけられ、俺は教科書から目を放す。

「お前は終わったのか？」

「いいや、まだまだ。ちよつと分かんない漢字があるんだけど、教

えてくれない？」

「ちようどいいや。お前魔法化学分かんない？俺は全く意味分かんなくてさあ……」

「どれどれ？」と俺はルナの指差す漢字を見てやる。

どうやら読みが一緒に意味が違う漢字らしい、外国人はそういうところが難しいのかもしれない。

あと、ルナって超字が綺麗なのな。惚れちゃうぜ。

ルナは逆に俺の机を覗いて俺が知りたい点について考えてくれているようだった。

「ルナ、この漢字はさ、あれだ。cuteとloverlyみたいな違いだな」

「ニュアンスの違いってこと？じゃあ翻訳するときは意味を間違えないようにしないと」

ルナのノートは漢字の隣にアルファベットらしきものが、これまた綺麗に書いてあったり、とってもノートを使っていると言っ感じがしていた。

「魔法化学はどこが分かんないの？」

「そうだな……。感覚が分からないって言ったら困る？」

「いえ、十分。これが錬金術よ」

そう言うところルナは手のひらの上に乘せたプラスチック製のシャーペン、短い式の詠唱をして鉄にして見せた。

「うーん、それは分かるんだけど……。どうなったら鉄になるんだ？」

「プロセスは考えてちゃだめ。プロセスを飛ばすのが魔法なんだから。あえていうなら、詠唱時に決めるの」
「どゆこと？」

ルナはため息をついて、それからもう一回詠唱を始める。

「アイスレオ、シス、テ、ミスリユート、アルケーン。アイアーン、ステ、ラフリ、ダ、シ、ビニル」

今度は鉄と化したシャーペンが元に戻っていた。

「これを訳すと、『錬金術を開始する。鉄をプラスチックにせよ』と言う意味になるの。別にドイツ語じゃないからね。誰が編み出したのか知らないけど、魔法言語よ」

「いや、それくらいは分かる。魔法物理にも一応そう言うの出てくるし」

「ならいいじゃない？ 深く考えなくていいの。先人の編み出した式を詠唱していれば大抵は成功するから。発音ミスで大変なことになる事はあるけど」

「そうか、ならこれは俺のマナの使い方が悪いのかな」

ルナは「そう言うことだと思うよ」と言い残して、また伊達眼鏡をかけて自分の机に向かう。

俺も負けられないとは思ったが、まあ、張り合っても無駄そうだしっか。

二人の作業は夕方まで続いた。

拳句に俺はまたなっちゃんに頭をなでなでされた。

夏休みが始まって早くも二週間が経とうとしていた。

残りが3週間と言う事を気にしながら、俺は今日も例の論文を書き続けていた。

「そういえばあれから連絡ほとんどないんだよなあ」

俺は例の魔物の件が最近では悪い夢だったのではないかとすら思ってきた。

だが、それは心の整理が付いていない何よりの証拠でもあった。

メイさんはなぜいきなり怒りだしたのか。

それを時々考えてもみたが、日々記憶が薄れていく中で、それについて考える事もあまり多くなっていた。

だが、噂をすればなんとやら。

昨日手紙が届いたのだ。

俺あてに赤色の封筒。

見た目だけでも不吉なそれを開けてみると、それはメイさんからのモノだったのだ。

どうにも、今週中には俺を迎えに来るらしい。

封筒が赤いのは赤紙と話を混ぜたらしい。

まあ、「冗談になってない！」と言うところだな。

「あ、私も夏休み中に一回本国に帰国しないといけないんですね。アス力が発ったあとに帰ってもいいですか？」

などと、ルナは俺の事など気にも留めていないようだった。

なっちゃんもメイさんが来たら俺を喜んで差し出すとか言いおるし……。

「つかどんなことやられるんだろ……。軍事訓練なんて参加したくないのに」

「いや、たぶん訓練らしい訓練はすぐにはやらされないと思うよ。まずはA Aの使い方の講習とかやるんじゃないかな？」

冗談じゃない。

適当に乗って乗りこなせてたんだからいいじゃないか！
あ、乗りこなしてたつてのは違うか。

ピンポン

「あ、誰か来た」

「はい」となっちゃんが玄関に歩いていく。
しばらくしてメイさんと居間に入ってきた。

そっぴやメイさんとはシリアスな面ばかりで思い出す暇なかったけど、俺この人の裸見ちゃってるんだよなあ……

っは！？

いかにいかに。

思春期とは言え、自重していかないと。

「じゃーね、アスカ。ちゃんと帰ってきてね」

「いや、別に戦争に行くわけじゃないんだから」

「まあ、そのための準備だな」

「だから俺は戦争なんて行かないって！」

メイさんは「ふう」とため息をつく。「行くよ」と言っ手招きをした。

覚悟が変わっていない事に失望でもしたのだろうか？

だがむしろ失望してもらってここで平和に帰るのもそれはそれでいいのかもしれない。

とか思ってしまう俺はやっぱり覚悟が足りないんだろうなあ。

「じゃ！　しばらくの間留守にするんで！」

俺はそう言っ荷物の入ったトランクを片手に玄関から出た。

07 d e s i r e (後書き)

どうでしょうかね？

今回は大半が説明だったような……

感情表現と言うのはなかなか難しいものですね……

意見感想お待ちしております。

08 S e c r e t L i a r (前書き)

今回はルナ視点です。

女性視点で物事を上手くかけるか分かりませんが
頑張ります。

少女はアカツキから離れ、北西にある新ドイツの地にいた。

少女の名はルナレア・サクヤ・S・タール。

その容姿は、腰に向けて長く伸びた銀髪に、歳相応の背丈とすらりとした体型。

そして一番特徴的なのがその燃えるように真っ赤な瞳だった。

さて、彼女がこの地に戻ってきた理由だが、それは帰省半分、仕事半分だった。

「まあ、まずは家に帰ろうかな」

私は本国に帰ってきて思考言語を完璧にドイツ語に切り替えてからそう言った。

それから一回深呼吸をして、空港の入口から一步踏み出した。

そこでは天然色の金髪を風で揺らして待っている人物があった。

「サクヤー。迎えに来たよー」

彼女は私の幼馴染のエリカ、エルザ・エリカ・ハイディングスフエルト。

私が留学してからも、ほぼ毎日ライブチャットをしていたので、今の再開もそう懐かしさを感じる事は無い。

「エリカだけ？ ほかのみんなは？」

「用事よ用事。こんな事してあげるのはアタシくらいなんだから感

謝しなさいよね」

「はいはい」

等いつもの調子で会話が弾む。

「お父様は元気？」

「うん、まあね。病気も最近は回復に向かってるみたい」

エリカの家族は父子家庭で、今はその父も病気で入院しているのだ。

だが、それは私が留学する前からの話である。
もうだいぶ長い事入院している事になる。

「あ、私車かつたんだ！ 乗ってく？」

「乗ってく乗ってく。やっぱり赤色？」

「もちろん！」

「エリカは本当に赤色が好きだねー」

他愛もない話を続けられるのは女子高生パワーというやつなのだろうか？

自分でもよく話が途切れないものだとか思っていると、あっという間に私の家にたどり着いていた。

「じゃ、駐車場に置いてくるから待っててー」

「はい」と返事をしてから、私は久しぶりに自分の家を眺めた。それはどこか西暦以前、中世的な雰囲気を感じさせる石造りのお屋敷で、建物はし字型に曲がっており、伸ばすと1kmくらいはあるんじゃないかと言うほどに大きかった。

自分の家とは言え、やはり大きい。

お父様はつい最近まで新ドイツ軍のかなり上位の仕事を受け持っていたらしい。

定年してからはこのように大きな屋敷を構えてのんびりと暮している。

「お待たせー。じゃあお父さんに挨拶しにいこう」

エリカはそう言うとそのまますんと私の家に堂々と入って行った。

私もそのあとを追いかけて屋敷に入る。

この屋敷は中が広い割には空き部屋も多いため、執事やメイドなどの者は最低限しかない。

留学前から増えていなければ、多分4人である。

「お父様は書斎ですか？」

「最近は籠りっぱなしだから多分そうよ」

エリカは一応この家に住んでいるのだ。

だから幼馴染と言うより家族に近い。

それにしてもこの廊下は長い。

前々から思っていたのだが、エスカレーターの平面版みたいなやつをつけたほうがいいのではないか。

そうこうしているうちに書斎の前に着く。

書斎の扉は魔術によって守られているため、その表面には魔法陣が幾何学的に彫られていた。

その重い戸を開き、中に入る。

「お父様いますか？」

中の荒れ模様はいつも通りで、その書類の山がごそごと動いたと思ったら、60を超えた父がバサツと山の中から出てきた。

「何の用だ？ お、ルナレアではないか。戻ったのか」

「はい。ただいま帰りました。また一週間後には出ていく予定です
が……」

「ふむ、それでいい。勉学は自分の思うようにした方がいい」

「ありがとうございます」

父は書類の中から一つを持って机に戻ると、なにかをせっせと書き始めた。

「それでは失礼します」

「ああ、ルナレア。あとで頼みたい事があるのだが」

「なんでしょう？」

「SSR、CR、0121」

暗号。いや、コードだ。

それは軍の最高機密についての話を含むと言う事だ。

それを聞いてから書斎を後にする。

そして最後に行く場所と言えば自分の部屋くらいしかなかった。

「やっぱり自分の部屋は落ち着くなあ」

私は自分の部屋に着くやスニーカーをほっぱり出して、ベッド

にぐでーと横になった。

「お父さんに呼ばれたんでしょ？ 行かなくていいの？」

「0121は時間。1時21分に来いってさ」

新ドイツ軍の実験に参加するのだろう。

なんの実験？

新型AAの起動実験に決まっている。

なにせ私はAAとの相性が世の中に10人といないSSSクラスらしいからだ。

また起動をやらされるのかと思うと自然とため息が出てきた。

先生とアスカと海に行ったときに言ったあの言葉、「戦闘を見ると嫌気がさす」というのは嘘ではない。

だが、そんな自分の意志とは関係なくSSSクラスに生まれてしまい、その結果お父様にAAの起動を毎回手伝わされると言うのは皮肉というのだろうか。

「ねえエリカ、紅茶飲みたい」

「しょうがないなあ、淹れてくるからちょっと待ってて」

エリカはそう言う私の部屋を出て行ってしまった。

私はふと時計を見る。

あ、もうすぐ21分。

紅茶飲みたかったなあ。

と思いながらエリカにメールでそれを知らせ、急いで父の書斎に戻った。

書齋から父のテレポーターを使って実験会場に向かうと、そこは
どうやらどこかの体育館のようで、しかし天井は物凄く高い。

「ルナレア、いつものやつを頼む」

「はい」

そう答えて私は一步前が出る。

辺りを見回し、見ている科学者、と今回は魔法学者も混じっているようだ、全員と目を合わせてからAAにコンタクトを開始した。

AAの展開前状態のモノに触れると、意識が拡張されていき、周りの事がよりクリアに感じられるようになる。

この感覚も慣れたものだ。

「次」

「はい」

AAを展開させる。

ここまではいいのだ。

ここからが暴走の危険がある。

「歩行から走行、飛行」

「はい」

言われたようにするだけだが、ここで暴走して飛んだまま帰ってこないとかいうこともあるらしい。
そう考えると急に怖くなってきた。

だが、今回は言われた事を暴走なくこなす。

「自律AIを起動させ、魔術シールドを展開」

「はい。AI起動」

始めましてご主人。

私の名はゴットフリートです。
なんなりとご命令を。

「シールド展開」

了解

その声とともに私の手のひらの先には大きい大きい魔法陣が出現する。

それが顕現した後、マシンガンをそれに当てていく。

だが、もちろんそんなものは豆粒のように弾き返していく。

まったく面白くない。

次にレールガンで射出された球を受け止めて見せる。

本当に詰まらない。

ご主人は楽しい事を御所望ですか？

まあそれなりに。

それでは楽しませてあげましょう。

私は一瞬ゴットフリートの言っている意味が理解できなかった。
だが、すぐに大変なことに気付く。

「指令、南の山脈の方に魔物が出現しました」

ご主人の望んでいる楽しみは戦闘ですか？

フリート、あなたが生み出したって言うの！？

いえいえ、そんなわけがない。予知魔法ですよ。ちなみにあと10秒後にこの直情にレポートしてきます。

な！？

あなたの魔力を狙ってね。

08 S e c r e t L i a r (後書き)

どうでしたでしょうか？

最後になるにつれて眠くなってきたしまい、文章に覇気を出すことができませんでした。
これはミスった。

感想お待ちしております。

あと5秒後に直上にテレポートしてくるぞ。

そんな、ここは研究施設なんですよ。

こんなところに魔物が来られたら……

来た！

フリートがそう言った途端に辺りがふっと暗くなり、真上には魔物が浮かんでいた。

平らな板の様な形をした魔物の下部には幾何学模様が描かれており、それが何らかの魔法陣だと判断するのにルナには1秒とかなかった。

その魔法陣の幾何学模様を両断するかのように刻まれた一本の線が、扉を開けるかのようにパツクリ開いていく。

そこからぎょろりと眼玉のような物体が飛び出し、まるで首をならすかのようにクリクリと動き、最後に私を真正面から見下ろす。

「ルナレア！ 援軍は5分間は来ない。その間だけでもここを守ってくれ」

言われなくてもそのつもりだ。

だが、私はその迫力に圧倒されていた。

フリートがコアを必死に探しているようだが、まだ見つからない。

それほどこいつはでかいのだ。
きつとサッカーフィールドの数倍はある。

そいつが私を見つけてから数秒と経たないうちに攻撃が始まった。
ついこの間日本に現れたのとはまた違うパターン。
擬似的に結晶化したマナがミサイルの様に私に迫りくる。

「フリート？」

「おうよ！ 今探してるとこだぜ被検体！」

被検体とは何か！？

と言い返したかったが、すでにマナミサイルの軍団は私の目の前
まで迫っていた。

とっさに飛翔し、ミサイル群を地面にぶつけて避ける。

「まだ？」

「まだだ！ そう慌てるなよ被検体。それよりこれ使いな！」

マナミサイルはすでに新しいものが作られ、私の後ろにきつちり
と付いてきている。

それに向けてフリートの召喚してくれたサブマシンガンをバラバ
ラと乱射する。

だが、数は圧倒的に向こうの方が上。
サブマシンガンの弾薬が切れると同時にミサイルが私を追って
くる。

サブマシンガンを捨て、逃げて転じた。

「おう被検体！ コアのだいたいの位置が掴めてきたぜ！」

「どこ？ 表示して！」

「ここよう!」

それはご丁寧にもさつき私を見下ろした眼のさらに奥。
このバカでかい要塞みたいな魔物のほぼ中心だった。

「次の武器だ。ほらよ!」

またサブマシンガン。

それが私の目の前に放られるように出現する。
それを器用に取り、そのまま壁の様な魔物に向けて乱射する。

すると銃弾によって壁はあっさり削られていく。

「なるほど質より量って奴か」

「フリート! あなたさつきから……。遊びじゃないんだから!」
「へいへい。じゃあ一発超強力な武器といきますか」

私は再度弾切れになったサブマシンガンを放り捨て、次に現れる
武器を待つ。

するといきなり「Aufmerk samkeit / 注意」なる文字が視界の中央に映し出され、その上に武器の説明ウィンドウが立ち上がる。

この武器は本当に危険なほど強力らしい。

この前の魔物の「熱線」よりも強力。

それは圧縮粒子砲なるものだった。

要するに粒子ビーム砲だ。その威力は……。私も直接は目にした
事がないから分らない。

「ぶっ飛ばしやがれ!」

「チャージに時間がかかる!?　ならもう一個サブマシンガン」
「おうよ!」

サブマシンガンが右手に握られ、巨大なバズーカのような「ビーム砲」を左に抱える。

サブマシンガンで後ろの敵を撃ち落とすと同時に加速し、敵を突き放す。

「チャージ!　……つつ!」

マナミサイルは予想外に早かった。
これではせつかくの強力なビーム砲も使えない。

私はそこから撃つのをあきらめて、瞬間加速を使って逃げる。

「おい被検体!　チャージが完了した。あと30秒以内に撃てないと再度のチャージが必要になるぜ!」

フリートがそういうとAAの残りエネルギーの上にもう一つゲージが追加され、再度チャージが必要になるまでの時間が表示された。
残り27:09:34

「ちょっと体に負担かかるかも……」
「何をする気だ!」

「ちょっとね」といって瞬間加速で最大スピードを出す。
後ろがピタリと後ろについてきているのを確認すると、私は自信にリフレクターをかけてその体を跳ね返した。

「ぐぐぐ……」

そのスピードからのいきなりのベクトル逆転。

Gによつて体を引き裂かれそうになりながらも私は自分を跳ね返すことに成功した。

「撃て――！！！！！！！！」

さすがは魔物、切り返しが早い。

だが、これだけの距離があればいける！

そう判断するとルナの頬がふつと笑みを浮かべる。

なんに対する笑みか？

私は自分の皮肉を笑ったのだ。

昔は自分は普通の女の子だからこんなことしたくないと、いつも願っていた。

そう、いまだってそう願っているはずだ。

私は普通の女の子でいたい。

引き金が引かれる。

そう、私の願いはいつでも「普通」だった。

だが、いやいやにもこつした事に参加し、私はどんどん普通から遠ざけられていった。

「やっ
たな被
検体！」

私の放った粒子ビームはほとんどのマナミサイルを潰すとともに本体の中心部分をも砕いた。

ほら、今も。

なんで、なんで笑っているの？
私は、もう。

「普通じゃないんだ」

09 **Leichtsiniges Fahren** (後書き)

更新してないところもアクセスが減るものなのですか!?(泣)
僕の文章は確かに駄文ではありますが。
もっと暖かい眼が欲しい

ところで今回のE・Aはどうでしたでしょうか?
楽しんでいただけましたか?

今回はフルにバトルです。
というわけで楽しんで書きました!

今回は自分的には結構スピード感が出ていて良かったのでは?
と自画自賛できるレベルの出来です。

感想よろしくお願いします。

ついでに評価もしてくれると嬉しいです

これからよろしくです!

10 Signal Stop

アカツキ軍のAA特殊部隊にスクランブルがかかったのは突然の事だった。

新ドイツに出現した魔物の撃退要請。

AEUの新ドイツとアカツキはさほど離れておらず、距離にして約30万Km。

まあ、国外だからそれなりに距離はあるんだけどさ……。

その魔物がここまで来るのにまだ時間がかかるこのことなので、俺たちAA特殊部隊のメンバーはヘリコプターの様な形をした小型のジェット機で司令部からの作戦指示と敵とのランデブーを待っていた。

「司令部からの命令が来たよ」

スクランブルで出動したと言うのに表情一つ変えていないメイさんは、そう言いながらヘリコプターの壁に付いている画面を見るように促した。

彼女は俺のというより、この部隊の教導官だった。

この部隊には俺とメイさんの他にAAを使える人が2人いて、その二人ともがつい最近入った新人なのだという。

この前の事件の時は運がいいのか悪いのか休暇を取っていたらしい。

「これ、作戦って言うかただの命令ね。どんな手段を使ってでも駆逐しなさいって。これがその魔物の写真」

それはほんの豆粒程度にしか映っていなかった。
多分一定範囲内に入ったら攻撃してくるタイプなのだろう。

「教官、これって人型ですか？」

「ん？ …… そうみたいね」

こんな豆粒で分かるのだろうか？
もしかしたら俺の眼の方が悪いんじゃない？

とか思いながら眼を細めていると、いきなりアラームが鳴りだし、
機内に放送が流れた。

「あと30秒で戦闘空域に入ります。隊員はさっさと出撃しちゃってください」

ちなみにこの輸送機を操縦しているのはアリアだ。

どうやら俺が今持っている「アリア」と言う機種は、正確にはA
Aではないらしい。

「M a g i c a l E n h a n c e r」というらしく、A Aに魔法能力拡張機能を付加したものらしい。

それは人格を中に宿しているため、そういうこともできるらしい。

「そういうことらしいね。それじゃあいくよ！」

メイさんはそういうとヘリの扉をガラリと開け、早々と外に身を
投げ出した。

「じゃあ、俺たちは先に」

そう言つたとあの二人も行ってしまい、へりの中には俺だけになった。

だが、思う事など無い。
あいては魔物だ。

「いくぜアリア！」
「いつでもこーい！」

俺はそう言つてへりから飛び出し、すぐにMEを起動させて飛行する。

魔物は倒すだけだ……

俺たちは目標のすぐ200mくらいの範囲まで接近していた。

「何あれ、魔物じゃない!？」
「教官！ あれ魔物じゃないっすよ!」

AAの二人はともにそう叫び続けていた。
メイさんは敵の攻撃をシールドで防ぎながらも驚きの顔を隠せな
いでいた。

俺もまたメイさんと同様に驚く。

「アスカ君！ 周りを見て！」

ハッと気づいて敵のレーザーを避ける。

銀色の髪、瞬きを禁じられたように動かない真つ赤な瞳……

それはどうみても彼女だルナレア・サクヤ・S・タール。
見間違うはずはない。

「教官！」

「……魔物に、寄生されているの？」

「どうすれば？」

メイは為す術が見当たらないと言う代わりに下唇をかみしめる。

「人間を傷つけないように攻撃して、できれば捕獲。だけど……」

これはやっかいだとメイは心のうちで言葉をこぼす。

彼女は気付いていた、ルナがMEと同程度の力を持つAAを装備している事を。

俺は時折ルナの放つレーザーを避けているだけで、何もできなかった。

アリアの示したコアの位置、それは左胸、すなわち

心臓

それは紛れもなく心臓の位置。

それは切ったりしたら死んでしまうんじゃないか。

アスカの心は不安で満たされていた。

「アス力君！ 援護して！」

俺はその声に反応してメイさんの後ろにつく。

「私がキャプチャーするから、攻撃跳ね返して」

早口でそう言うと、俺に先に行くように促す。

俺はリフレクターの魔法陣を描き、それを楯の様にしてルナに向かって突進していく。

リフレクターでレーザーをプリズムを通すのと同じ様に拡散させながら突っ込む。

だが、ルナの眼の前まで来た瞬間、何をしていいのか分からなくなってしまった。

この振り上げた剣で袈裟切りにでもすればいいのだろうか？

だが、もし魔物がシールドを張ってくれなかったらルナは……？

それは俺の大切なものを守りたいと言う事に大きく矛盾していた。歯をかみしめ、俺はその真横を通過した。

「アス力君、何してるの？」

「……できません」

俺にはルナを攻撃することなんてできない。

じゃあ、この先にいる人たちを見殺しにするの？

足止めはできているけど、このままじゃアカツキを通過することだってあるかもしれない。

それは俺の想いにさらに激しく矛盾していた。
やりたくない。

でも、やらなくちゃいけないのか……？

「俺には人を傷つけるなんてでき……」

「顔をあげなさい！」

メイさんの言葉に忠実に、顔を上げ、ルナの向こうにメイさんをも見る。

メイさんの持つ杖はこちらに向けられ、その先には桜色をした光の玉ができていた。

砲撃魔法。魔力によって魔力弾を生み出し、放つ。すごくシンプルな魔法。

その特徴は、対象に殺傷を与えない事。

「なにをするんですか！ やめてください！」

俺はほぼ反射的にメイさんとルナの間割って入る。

「どきなさい。さもないとまとめて撃っちゃうよ？」

「どきたくありません。この子は俺の友達なんですよ」

「じゃあ、しょうがないね」

無情にも、光球の内側に内包されたエネルギーがこちらに向けて放たれた。

光の奔流が俺のシールドに激突し、俺はその圧倒的な物量に負け、ルナごと近くの山に激突するまで吹き飛ばされた。

シールドは粉々に砕け散り、魔力が俺とルナの力を根こそぎ奪っていく。

文字通りエネルギー残量がものすごい勢いで消失していき、止まるころにはすでに0になっていた。

「もうちょつと冷静になりなさい」

メイさんは一瞬で山に降り立つと、そう言いながらルナにバインドをかけた。

「相手の状況をよく考えな。彼女はAAを着ていた。なら魔力ダメージによってAAのエネルギーを奪う事で動きは止められるの」

そうだ。

殺傷能力のない砲撃魔法であれば彼女を物理的に傷つけなくても良かったんだ。

それが分かっててメイさんはあの砲撃魔法を使っただ。

俺はふとルナの方を見る。

さっきまで見開かれていたその赤い眼は今は見えない。

その長い銀髪とは対照的な黒いAAもエネルギーを失ってもうピクリとも動かなかった。

「彼女はとりあえず助かると思う。アスカ君が邪魔をしなければもっと早く助けられたかもしれないんだよ？」

「教官。説教は帰ってからにした方がいいのでは？」

メイさんは「ふう」とため息をついて俺に向き直った。

「そうだね。あとで説教しないと。でも今はとりあえずこの子を精

密検査する方が先。アスカ君、アリアにへりをこつちに向かわせるように言って」

「はい」と俺は疲れきった声で言うのだった。

10 Signal Stop (後書き)

ああ、ダメだ。

グダグダだ。

これはダメだ・・・。

これ書いてる途中に友達と会話をしたんですよ。

だからかな？

ちよつとダメだ。

ああ、でも感想はほしいです

よろしくお願いします。

普通じゃないんだ。

私はもう、普通でいられない。

そう思いながら貫かれた魔物の本体を見ていた。

どうやらこれで終わり。

今日のところは普通に帰れる。

そう思って貫かれたはずの魔物にコアが再構成されるのを見た。

あ、また普通に帰れないんだ。

彼女の思考はとつてもこまぎれにしか続かない。

「おい被検体！ 魔物がっ！？」

あ、私、体貫かれた。

自分の事なのにそれほどにしか感じられない。
すでに彼女の意識は魔物に奪われ始めていた。

ロールアウトされたばかりの真っ白なAAが、魔物から浸食を受けて真っ黒に変わっていく。

貫かれた鳩尾の辺りから体の中にまで触手が這うような怖気のする感覚が浸透してくる。

それは十秒と経たないうちに私の頭の中にまで到達された。
その感覚が首の下まで迫る。

ああ、私はこうやって死ぬのだろうか……。
結局夢だった普通の生活も手に入らずに。

私がアカツキに留学してきたのは高校が始まってすぐだった。
留学を志望した理由は、お父様には語学を学ぶためと言ってあったが、実際は一人暮らしをして少しでも普通に近い生活をしたかったからである。

実際にアカツキに来てからはとても楽しかった。
周りは私の素性など知らない。
外国からやってきた女の子と見てくれた。

その接し方も今までみたいに実験体としてではなく、「ただの」
友達としてのものだ。
それは世間ではとっても普通なんだと分かっている、それが夢
だった私は嬉しかった。

一人暮らしをするのにも、マンションの一室を借りて自由に。
時には自炊するのが面倒でインスタントラーメンを食べてみたり、
きつとごく普通の、誰とも変わらない生活を送っていたはずだ。

なのになんで私はドイツに帰ってきてしまったのだろう。
ドイツに帰ってきたらA Aの実験体にされる事は分かっていたはずなのに……。

だけど私はそんなことも忘れて、ドイツでのいい思い出ばかり
思いだして……。
きつと現実逃避をしてたんだと、今では思う。

ああ、ダメだ。

もうそれが遠い昔に思える。

もう終わるんだ。きつと走馬燈って奴だ。

だから私の人生は結局異常なままで終わり。

幕を閉じる。

目覚めは唐突だった。

ハッと目を覚ますと真っ白な天井が目に入る。

だがそれが天井ではない事を知覚する。

どうやらカプセルに入れられているらしい。

私は特殊な液体に一糸まとわぬ姿で浮いていた。

実験体として昔からあらゆることをされてきた私は、その状況を把握して騒ぐでもなく、特に大きな抵抗をせずにカプセルの外の真っ白な空間をうかがう。

カプセルの外にはやはり白衣の研究者と黒衣の魔学者たちが大勢いて、私を見上げている。

それらは自分の端末と私とを交互に見ながら、ときどき話合っている。

カプセルの中は外の音が完全に遮断されているので何も聞こえなかった。

私はその白い空間にそれ以外の何かを見つける事が出来なくて詮索するのをやめた。

そして、思ったのは。

ああ、また生き残っちゃったんだな……

そうしてカプセルの中で漂いながら解放される時を待っていた。

いつもそうなのだ。

私が実験をしてもときどき事故が起こる。

確かに今回ののは異例だったが、前にもA Aが暴走した事があるのだ。

私はその時もいつの間にか病院に運ばれていて、ベッドに寝かされていた。

毎回、今度こそ死ぬかと思うと次の瞬間にはこうして目が覚める。

「ルナレアさん。気分はいかがですか？」

「良好」

端末を通じて一人の医師が私に話しかけてきた。

「それはなによりです。それでは今からあなたの置かれている状況を説明するんで、心して聞いてください」

「了解です」

医師はめんどくさそうにため息をつくと言明を始める。

「あなたはM A Aの実験中に敵性魔力結晶生命体と戦闘して、結果A Aごと浸食されました」

「それくらいは把握しています」

「あ、そう」と医師は続ける。

「浸食された後、ドイツのA A部隊と戦闘し、見事に部隊を破滅させました。それから隣国のA A部隊を要請しましたが、それらも撃退され、最終的にはアカツキのA A部隊があなたの捕獲に成功しました」

「アカツキの？ それはまた遠くまで行っていたんですね。被害は？」

「被害は各国A A部隊の隊員が重体になったくらいで、民間人への被害は家屋の破損程度だったみたいですよ」

それを聞いて少しホツとする。

これでもし民間人など巻き込んでいたら私はどう謝っていいか分からなかった。

重体にしてしまったA A乗りの人にはあとで謝りに行かないと……。

「それから、あなた自身の事です。あなたと戦闘した者の証言からコアが心臓の位置にあったという情報があったので、調べさせてもらったところ」

聞く覚悟はできていますか？

そう言わんばかりにそこで言葉を切る。

「……どうぞ」

「では。……単刀直入に言いますと、あなたはまだ敵性魔力結晶生命体に取り込まれたままです。いや、この状態からして取り込んだままという方が正しいか。表面上は分かりませんが、細胞の一部が敵性魔力結晶生命体のそれと同じ物とすり変わっていました」

「え？」と分かっているながらも聞き返してしまう。

医師はそれをめんどくさそうに流すと続きを言い始める。

「心臓もまだ魔物のコアと同化しています。そのため、今後あなたの体には変化が起ると予測されます。現在は身体能力が著しく上がるだけで特に体外的な変化は見られませんが、今後羽根が生えたりしてもおかしくないでしょう。それと……」

「なんででしょう？」

「脳を調べてみたところ、あなたの意識に壁を見つけました」

「壁？」

意識に壁とはどういうことだろうか？

そう思っていると医師がまたため息をつく。

「要するに、あなたは二重人格になった可能性があると言う事です。今後行動は気をつけるように。それと、身体能力が上がりすぎているのでAAで常に力を抑制する必要があります。そういうことで新世代型AA、ゴットフリートはあなたの所有物と言う事に決定しました」

それはつまり厄介者を回されたということだろうか……。

いや、そういうことなのだろう。

フリートの方も浸食されていて危険な面があるのだろう。

「下にいる研究者たちがその事を調べたんだ」

「お礼を言っておいてください」

「分かった。それではカプセルから出るといい」

医師がそう言うのとカプセルの上部が開いた。

そこから出るとすぐ脇には待機状態で黒光りするペンダントの形をしたフリートが置かれていた。

私は指示通りに、まずそれを展開させて下着代わりにし、その隣に置いてあったYシャツとスカートを着て病院から出た。

俺たちのAA部隊は見事大きな被害もなく帰還できていた。

あれから3日が経つ。

俺がルナが起きるまでここにいたいと言ったので、この3日間は
このドイツの訓練場を一つ借りて訓練をしていた。

メイさんにこっぴどく説教された俺は、今日メイさん相手にPvPをやらされることになっていた。

PvPとはPlayer VS Playerの略で、決闘ともいう。

それは対人戦の特訓だと言う事だが、俺は正直効果はあまり期待できないと思う。

なぜならこの決闘では自分も死ぬ事は無いし、相手も死ぬ事は無

い。

結局命がかかっているかいはいかは思考を左右するとても重要な要素なのだ。

「アス力君。本気で、行くからね」

彼女のこれが、俺を殺す気と言うことなら、俺は間違いなく死ぬだろう。

だから俺はメイさんが必ず手加減してくると思っていた。

だが、その考えは甘かったと、遅くも理解する。

「だつりゃあ!!」

俺はメイさんの魔法砲撃を巧みに裁き、刀を上段から振り下ろす。

「甘い!」

俺の刀は彼女の杖に受け止められ、がら空きだった腹に蹴りを叩きこまれて吹き飛ばされる。

空中にシールドの応用で壁を作り、それに足をつける。

そこからまた切りかかるつもりでいたが、すでにメイさんは俺の間近まで来ていた。

「反応が遅い。周りをよく見て!」

そう言いながらさっきまで俺のいた場所を左手に持った槍型の武器で切りつける。

今のはかわさなければ確実に真つ二つになっていただろう。

「メイさん、今の本当に危なかったですよ」

最後まで言い切る前に後ろに魔力を感じてシールドを張る。
すると桜色の魔力球がそれに激突してはじける。

「本気で行くって言ったはずだよ！」

魔力球に気を取られている隙にメイは俺の上から杖を振り下ろしてくる。

俺はそれを刀で受け流し、次に来る左の槍を受け止めようとしたが、その速度に負けて刀を弾き飛ばされる。

俺がその刀に目をやっている隙に杖を持ち直し、魔力球を発生させるのにさほど時間はかからない。
少なくとも俺が向き直った時にはすでに魔力球はこちらに向かって発射されていた。

「リフレクター！」

辛うじて発生させたリフレクターでその射線を反らして、俺は新たに武器、ライフルを持つ。

それを持ってリフレクターの範囲から外れ、彼女の姿を探す。

「レーダーも使いなさい！！！」

声のした方、上を向くと彼女が槍を持って急降下していた。

太陽を背にしたそれに俺は思わず目をかばってしまう。

するとメイさんの槍がライフルを真つ二つに切り裂き、ライフルは魔力エネルギーを暴発させて爆散する。

「チェックメイトだね」

その声に目を開けると、杖を俺に付きつけるメイさんがいた。

「やっぱりこうなるじゃないですか。だからやっても意味がないって言ったのに」

「学ぶ事は多かったんじゃない？」

「それはそうですけど……」

「あと、ルナレアさんが目を覚ましたそうよ。こっちに向かってるって」

そうですか。

とあえてそっけない振りをした。

だがメイさんは杖を持ったままくすくすと笑い声を立てる。

「行ってあげたら？ 彼女はフリーらしいよ」

俺はメイさんの思い通りになるのが癪で、ここでルナが来るのを待つことにした。

11 source (後書き)

いつもより長いかな・・・。
それに説明が多い。

そしてやはり眠かったためグダグダになってしまった・・・。

ああ、悪いところはいくらでも見つかるなあ。
だれがこの小説のいいところ教えてww

よろしく願います。

12 Ordinary

気がつくとも夏休みも残すところあと1週間ほどになっていた。

俺はそれまでにMEをだいぶ乗りこなし、拡張現実でのゲーム訓練も10段階のレベル4くらいまではできるようになっていた。

ちなみにメイさんはレベル10だが・・・。

あと、レポートの方も夜中に頑張っていたおかげでラストスパートに入っていた。

ルナからメイさんからなっちゃんから魔法化学についていろんなことを教わりながら書いたそれは、自分でもだいぶ納得がいく出来になっていた。

「ルナー、課題終わったー？」

「ラストスパートってとこかな」

どうやらルナも課題はちゃんと終わりそうだ。

ちなみにあの事以来、ルナに特には変化は無かった。

二重人格どうのと言う話もその影を見せる事はこの数日間全くなかったし。

もちろん突然変異で羽根が生えてくることもなかった。

ルナ自身も体調は良好だと言うので、今のところあれほど大きな事件は起こっていないかった。

「ルナレアー、そろそろ時間だぞ！」

「はい！」

ただ、毎日決められた時間に精密検査をかけられる。
特になんの変動もないと言うが……。

「じゃ、またあとで！」

ルナはそういつとその場からレポートで病院に飛んで行った。

「アスカ君、君もそろそろだ」

「はいはい」

メイさんはその反抗っぷりにはあとため息をついていた。

俺の方はさっきいったシュミレーションの事だ。

アリアが用意してくれたそれは、MEの機能を使ってVR空間を作り、そこで戦闘の訓練をするというものだった。

「アリア頼むぜ」

「頼まりました！ 行きますよ！」

待機状態のアリアが強い光りを発したと思ったら、すぐに俺の周りの風景は消え去り、一瞬真っ暗になってから今度は真っ白な空間に放り出される。

今回のステージは重力があるらしい。

俺は放り出されてからすぐにMEを展開させて、それから床に降り立つ。

「敵は龍型の魔物を想定しています。いつも通り撃破してください」
「龍！？ そんな動物みたいな魔物いるのか！？」

「来ますよ！」

「分かつてる！」

俺は龍の吐いた炎ブレスをシールドを円錐形に展開して受け流し、右側の手で刀を握る。

ちなみにいつも使っているこの刀だが、最近説明書きを見たら一応名前が付いているらしい。

黒光ノクロビカリというらしいそれは、実はただの刀ではなく、高出力の光を纏わせたライト イバーとかビームサールの様な機能もあるらしい。

それを使うとエネルギーがかなりのスピードでなくなるという設定だが、必殺の一撃としての威力は十分だった。

「モードビーム、瞬間加速、リフレクタ！」

俺がそう言うと、次の瞬間に炎を消すほどの勢いで魔物に接近し、ビーム黒光で龍のあごを切り上げる。

「動物型でも討伐方法は同じ！ そんなことしてもそいつは修復するだけだからね！」

「動物型だからと言って生物と同じではないってことか。めんどくさ」

俺は龍の頭のところにリフレクタを張って、元の位置に戻ってくる。

この魔物はどうやら空間固定型の様で、さつきから体をくねらせるくらいはしてもコアの座標はほとんど移動していない。

「こつ言うタイプの魔物は大抵の場合町の中央に出現して町を一つ

滅ばしてくれます。ある意味ではすごく厄介な相手ですよ」

「確かに動きはのろいけど、こいつの攻撃力と防御力は半端じゃないな」

さて、どうやって退治したものか。

「提案ですが、射撃武器を使ったらどうでしょう？」

「射撃系は俺全然だめだったじゃん？」

「ME装備中なら自動照準が使えます」

ついこの間、メイさんに誘われて射撃場に行って来たのだ。

だが、銃の握り方がおかしいとか、もつと的を見るだとか、とにかく言われない放題言われてしまい、自分では射撃については諦めようと思っていたのである。

「そう言うのがあるんなら先に言えよ」

さつきからドラゴンの前に張ってあるリフレクタがキャパシティオーバーで割れる音がする。

俺はとっさに上に避けてプレスをかわすが、それは俺を追いかけてくる。

「じゃあ射撃系の武器で、何がある？」

「スナイパー」

「はいアウト　！！スナイパーライフルとか狙撃用の銃器じゃん！こんなアクションで使えるかよ！」

「あなたが狙う必要はありません。私が狙いますから！」

俺は何も責任取りません！

そう思うと左手が勝手にスナイパーライフルを握りしめ、魔物の

方向に銃口を向ける。

「つか助力していいのかよ。俺の訓練なのに……」

「いいんです。メイさんはレベル5以降は二人でやれと言ったのでMEの思考機能を利用しない手は無いと」

確かに、それは言える。

それに俺はアリアのサポートがないと絶対に動けないと思う。こつやってリフレクタとかの魔法が使えるのもアリアが支えてくれるおかげだし。

「じゃあ撃ちますよ」

「OKさつさと終わらせ！」

「えい！」

左手でカシュツと引き金が引かれる。

それと同時に、反動が俺の左腕に伝ってくる。

バカンと気持ちの悪い音を立てて肩が外れた、左肘が逆方向に曲がった。

変な体勢で撃ったせいだ。

痛みを感じる前にVR空間が閉じていき、現実世界に戻ってきた。

「ぬぎゃあああああ!!? う、腕があ！」

「なるほど、体勢とかも考慮しないといけないんですね。いい勉強になりました」

「アリアてめっ、いい勉強になりましたじゃねえ! 今の実践だったら確実に逝ってるぞ俺！」

俺は変な感覚が残る左肩を摩りながらそう言う。

「反省してますって」

「ホントかよ！ それにしては声が弾んでるじゃないか」

「……えい」

その明らかな悪意が込められた声とともに俺の現実の腕が逆方向に曲がろうとする。

「ぬああああ！ 何しやがる！」

「アスカの耐久性を調べようと思って」

「計算で調べりゃいいじゃんかよ！ って！ ちょ、アリアさん？
なんで怒ってるの！？」

「うるさいです！」

ちょ、それ以上逆に曲げたら折れるってマジギブ！

ちょ、ちょ、ちょ、ちょ、何さらに力入れてんの？

マジ折れるから！

「アリアはかまってちゃんだからね」

メイさん、今それ関係ありますか？

ちょ、アリア！

「アリア、アスカ君があまり喋ってくれなくてさびしいのは分かるけど、それ以上やったら本当に折れちゃうよ」

そう言いながらメイさんは口に手を当てて笑う。

きつと俺が一人で悶えているように見えておもしろのだろうが、
これ意外と大変ですよ？

代わります、メイさん？

と、そしたらアリアが力を抜いてくれた。

「アスカ君も、アリアは普段アスカ君としか話せないんだからもう
少しかまってあげないと……」

「分かりましたあー!!」

びしりと敬礼を決める。

「アリアってなんかしたい事あるの？」

「んー……、オシヤレとか？」

俺の背筋が凍った、様な気がした。

え、それは無理っす。

アリアは女、俺は男、その願いは叶えてあげられな……

「でもアスカ君は男だよ？」

メイさんナイス！

「大丈夫です。アスカはぎりぎり男の娘としても通用します!」

「確かに……」

確かにと言ったらアリアが本気になっちゃうでしょ！
メイさん助けて！

だが口が開いてくれない。

アリアおま!？

何をする気だ？

私に逆らえると思って？

え、アリアってそんなSキャラだったわけ？

「あ、想像すると案外似合ってるかも……」

メイさん、それは想像ではなく妄想では？
あとよだれよだれ！

「大丈夫、メイさんが面倒見てあげるからね！」
「助力感謝します！」

え、俺そんな服着ないよ。

ねえ、誰か助けて！

体動かないし、こんなのありなの！？

ねえ、俺の意思是　　！！？

その理不尽な事件はルナが精密検査から帰って来たことで終了した……。

12 Ordinary (後書き)

最後は僕の欲望丸出しです

アリアがあんまり登場していない事に気付いてこんな風にしてみました。

後悔は・・・、はは

まあ、今回は暇つぶしだったし、こんなもんでもいいんじゃないかな。

と思ってしまう俺

感想待っています。

13 Intention

人生最悪の日から丸一日が経ったであろうか……。

俺は昨日の疲れ（精神的な）を受けて、今日はずっとベッドに伸びていた。

「ごめんアスカ。私がもうちょっと早く帰っていれば……」

ルナはそんな風に言っていたが、帰ってきた瞬間に俺を見て顔がクと一瞬笑ったのを見逃していない。

まあ、それでも止めてくれたルナには本当に感謝している。

あのままだとホントに今頃俺は……。

考えただけでため息が出る。

むしろ考えたくもない。

「アスカー。気晴らしに外行こう？」

「ああ。ちょっと待って、あと一行書いたらいく」

それは例の課題。

昨日はあのあとひたすら泣いて寝たので、その分を取り返すべくやっている。

「オツケー。終わった。つかなんかすることあんの？」

「うーん……。町を案内してくれるとかどう？」

いや、ルナもこの町さすがに慣れただろう……。

とか思いつつも昨日の恩返しと思って、俺はこれをOKした。

そういうことで町に出てみて、風景があんまり変わっていないことにほっとしながら歩いていく。

途中女性物の服の店を避けながら、俺はいつも来ている店に着いた。

「アスカ、昨日の事ホントにトラウマになっちゃってるんだね」

くくく和小気味よく笑うルナに俺は少しの恐怖心を抱きながら店員にコーヒーをオーダーする。

「ほ、ホントに怖かったんだからな！ 女性物の衣装を持って迫ってくるメイさんが特に怖かった。あのとき男性恐怖症……、じゃなくて女性恐怖症患者の気持ちがあったような気がした」

「結構にあつてたのになあ……」

ルナの言葉にすら怖気を感じながら俺はコーヒーを飲む。

温かくて結構落ち着く。

「それホントやめてくれ。マジトラウマだわー」

「Sag t der japanische Junge was
?」

いや、言語変更してないのかよルナ。

言ってる意味が分らん。

今のタイミングからして俺をあざ笑いでもしているのだろうか…

…?

「あ、ここアカツキだった。言語設定変えとかなきゃ」

「つかドイツのM A Aは思考能力があるのに自分で言語は変えられないのか？」

「おい坊主！ 俺を侮ってもらっては困るなあ！ 別に変えられなかったわけじゃねえ、めんどくさかったんだ！」

「また口が悪い！ もうちょっと気をつけてよ！」

ルナは今もそのオシャレに着飾った衣装の下にM A Aを着てるため、ゴットフリートとやらを見る事は出来なかったが・・・。

「はじめまして、私M Eのアリアと言います」

「あん？ A Iなんかに興味ないんだよ」

ぬおっ！？ ひでえ。

つかすっごい素直だな。

そう思ってルナを見る。

「アスカどこ見てんの？ そんな体ばっか見ないでよ」

ふとルナの胸ばかり見ていた事に気づく。

別にそういう感情を持って見ていたわけではないが……。

「あ、すまん。でもフリートと話すのにどこ向けばいいんだ……？」

「普通に顔見てでいいって」

それはちよつと変な気が……。

「坊主、俺を口実に嬢ちゃんの前で胸ばっか見てんよ、がふっ！？」

「人前でそんなこと大声で言わないの！！」

今どうやったんだ？

どうやってデバイスの口を封じた！？

その技を俺にもぜひ伝授してもらいたい。

「ところでアスカ、この後なにかするの？ コーヒーショップに来て終わり？」

「え、てか別に計画とか立ててなかったし、ルナが行きたい場所とか分かんないし……」

「じゃあ服見に行きたいな……」

背筋が凍った音がした。

服と言いましたかこの子。

うーん、タイムリーなの分かってるのかな……。

一応遠慮してる感じだったぞ？

実はルナさんもアスカに女性物の服を着せて見たいとか？

却下あ！！

「ダメかな……？」

ルナが上目づかいで俺を見てくる。

いや、そんな風にされたら男としては断り様ないじゃん。とか思ってたか否か

「あ、えと……、い、いいぜ！」

「ありがとう！」

ああ、これでまたアリアに乗っ取られでもしてみろ。
俺は社会的に死ぬぞ！

宇宙空間と言うのは、先人が幻想していたものよりものすごく大変だ。

無重力では飲み物も満足に飲めないし、まず動きにくい。
下手に動いたら宇宙空間をどこまでも漂い続けてしまうのだ。

まあ、僕の住んでいるところは人工重力で数多くある宇宙コロニーの中ではまだ快適な方だったと思うが……。

だが、それでもできない事はたくさんある。
だから僕は下界に降りることを決心したのだ。

「君はイタリアから初めて送りだす留学生だからきちんとするんだよ」

なんて言われたような気がしたが、特に気に留めておかなくても僕はなんでもできるからそんなの意味がない。

このイタリアコロニーにも16年間は住んだが、もうお別れだ。
帰ってくる事はあるだろうけど、それはきつと近いうちではない。

そんな風に思いながら僕、アレシア・L・ヴァラエイナはシャトルに乗り込んだ。

13 Intention (後書き)

ダメだ。

眠い。

最近こればつか言ってる気がするけど本当です。

好調な時に書こうと思ったらずっと書けないんで、一応一週間は開けないようにと思っているんですが・・・。

クオリティがダメですね。

次頑張ろう。

感想よろしくお願いします。

14 Transfer

地球と言うところはなぜこつも物騒なのだろうか？

アレシアこと、アリスはシャトルを降りてきた途端に現れた化物と対峙しながらそう呟いた。

シャトルは無事着陸する事が出来たのだが、直陸した直後にドラゴンの形をした魔物が現れたのである。

だが、彼女にはできる事があつた。

「UMNならいけるかな？」

「私の方は問題ありません」

UMN、イタリアの新型らしい。

彼女はイタリアで建造された五機の一つの機を借りて地球に降りたのだ。

しかし、彼女の魔法能力は著しく低い。

なぜなら彼女は生まれも育ちも宇宙だからだ。

宇宙では地球と離れているだけA.Oの影響も少ない。

つまり魔法は大気圏外ではあまり役に立たないと言う事でもある。

だが、そんな宇宙育ちでも魔物に対抗できるほどに作上げられたのが、このUMNであつた。

UMNは全ての攻撃に魔法属性を付加させるようにされているのだ。

「じゃあいくよー！」

「了解！」

アリスの声に応じて光が彼女に集合する。
その光が消えた後に残されたのは、両腕にガントレットを、両足や胸にもプロテクターが見られる。

そして一番の特徴はその背後に浮かんだ翼のような形をしたオブジェクトである。

ドラゴンはアリスのUMNの放つ魔力に反応して首を動かす。

「脳波リンク正常、ワイヤレス制御空間の構築……完了。空間座標軸の決定……完了」

ドラゴンが体をこっちに捻り、ブレスの体勢に入る。

「ビット射出！」

「了解！」

アリスがそういうと背後の翼に付いていた六つの子機が反応して飛び出し、そのうちの三機が彼女の目の前にビームで壁を作り、ドラゴンのブレスを受け流す。

残りの三機はドラゴンのブレスをかわし、それぞれ頭、胴、足をビームで貫く。

ドラゴンはそれによろけ、ブレスを中断する。

僕は科学の力だけでも十分戦える！

私の魔法サポートもありますよ？

そうだね。

それにしても実戦最初にしてはよくできてるんじゃないの？

そうですね。

しかし思いあがらない事です。

「あ、魔物って本当にすぐ回復しちゃうんだね。じゃあそろそろコアを見してくれる？」
「了解」

アリスの視界に赤くコアの位置が表示される。
ドラゴンの心臓だ。
その位置にコアはあった。

「攻撃来ます」
「あたるとでも？」

ドラゴンの頭突きがシャトルに激突し、シャトルはこっぴみじんになって炎上する。
しかし、そこにアリスの姿は無い。

「瞬間移動って言うのは便利だねえ……。これがあればどこでも行けるんじゃない？」

「いえ、瞬間移動できる空間は限られています。それと、遠くに行こうとすればするほどエネルギー消費が激しくなります」

ドラゴンの背中でコアの位置にビームライフルを押しつけ、ずっと引き金を引く。

するとその銃口から高压に圧縮された粒子が放出し、光を放ちながらその圧力を持ってドラゴンをコアごと貫いた。

ドラゴンが倒れる前にアリスは再び瞬間移動で安全地帯に退避し、その黄色をメインとした機体を待機状態に戻した。

一人の魔物を倒したと言う少女は意外にもうちの高校への転校生だった。

いつも通り彼女の特徴をあげるとすると、それはすごくシンプル。自然な金髪は肩までで揃えられていて、背はたぶん160ちよつと、目は茶色、いまだき珍しいごくごく自然な少女だった。

今は軍の会議室で俺と二人きりと言う状況だが……。
こんな時なんて話しかけていいの？

「おい」

しまった。

おい。とか全然好意的に聞こえないだろ俺のバカ！

「Oh……, Ciao」
「え、えっと、チャオ？」

そうだ、彼女は外国人、日本語が分からなくても当然だ。
いやしかし、アカツキの高校に転校してくるのに日本語をしゃべれないと言う事がありえるのだろうか……。

「えっと、日本語は……？」

「Io sono spiacente. Io non posso parlare io il giapponese.」

「え、何？」

「Oops.」と呟きながら頭を軽く叩き、再び口を開く。

「oh……、ボク、二ホンゴ、シャベレ、マセン？」

片言だったが、きっと彼女はこう言いたかったのだろう。

「僕日本語喋れません」

なぜ僕？あとなんで疑問形？

まあ、疑問は置いておくとして、彼女はどうかやら日本語が話せないらしい。

「アリアはイタリア語できるか？」

「まあ、一応はですが……。話したいの？」

「だってわざわざイタリアから降りてきたのにこんな風になって気の毒だろう？」

「じゃあ、話してみますね」

アリアが話して分かった事。

彼女の名前はアレシア・L・ヴァリエイナ、イタリアのローマ出身。

今まで地球に降りた事は一度もないらしい。

それならば自然な髪の色も分かる。

アリアたちはなんだか楽しそうに話しているが、俺は一人取り残

され、会話にも入って行けずとても疲れた。

「Io sono spiacente. Non sia me
sso in conversazione」.

「お話しできなくてごめんなさいだつて」

「そうか。気にするなつて言つておいてくれ」

気にされても入れるわけではないのだからな……。

「Un'aria pu? interpretarlo?」

「私が通訳すれば?つて」

「そ、その手があつたか!？」

だが、いざ話せると分かつて俺は何をしゃべつていいか分からなかつた。

「あ……」

「はい。書類提出してきたからもう帰つていいよー」

しゃべろうとしたタイミングでメイさんが入ってくる。

いいし!

どうせあと数日したら学校で話せるから!

14 Transfer (後書き)

ダメだなあ。

新キャラ登場がぐちゃぐちゃってどうなのよ・・・。

まあ、これからもがんばるとしますか。

感想よろしく願います。

波乱の夏休みが明けてすでに1週間が経とうとしていた。

その1週間の間には魔物が出たりとか、特に大きな事件は何もな
く、ほぼ元通り平和なお昼寝タイムが……

寝たら電気ショック

戻ってくるはずもない。

俺には常時見張りをしてくるアリアと言う存在がこの夏休み中に
できてしまったのだ。

「アスカ君、これアリスから」

「お、おう」

右隣の席の女子からそれを受け取ると、そのもう一つ隣にいるア
リスをみてからその紙を開いた。

そこにはびつしりとアルファベットの列が並んでいた。

手紙……？

「お、俺にはアルファベットの羅列にしか見えんのだが……」

あーあ、せっかくアリスさんがアスカに書いたラブレターかもしれ
ないのに、読めないなんて残念だねえ……

いや、それはありえないだろ。

と思いながら携帯端末にそれを読みとらせる。

意外と普通の文ですね。

あとで一緒に購買に行こうだなんて。

ふと右を見るとアリスがこちらに顔をのぞかせて手を振っていた。
とりあえず笑顔で振り返しておく。

そのあとで「はあ」とため息をついてから前に向き直る。

しかし、なぜ俺を誘ったのだろうか？

まあ、あいつと話せるのが俺とルナとフリートアリアしかないのも確かなのだが……。

「授業終了！あとチャイムが鳴るまでは自習」

いや、なんの授業だったかさっぱり分からんし……。

そう思いながらも真つ先に端末をポケットから引っ張り出して
じる。

「? gi? grati? Io andr? per l'a
cquistare presto」

「はい、アリア通訳」

「もう自由なんだよね？早く購買に行こう。と言っ意味です」

先生の話も結局分からないのか。

「先生はチャイムが鳴るまで自習だと言ったって伝えてくれ」

「Disse l'ingnante che era st
esso - studio fino ad una campan

a suon?」
「Oh, ? . . . Poi io studio un po
co pi?」

アリスはそう言うとおとなしく自分の席に着き、端末を出して何かをし始める。

じゃあもうちょっと勉強する。ってさ

言葉がうまく伝わらないのは不便だなあ。

と思いながらも俺にはどうする事も出来ない。

まあ、ルナが必死で日本語教えてくれてるからすぐ喋れるようになるだろうけど。

なんとか聞き取れるところまではいつたらしいし。

「しかしもうチャイム鳴るよな。先生も五分の自習時間を与えるくらいなら雑談でもして間を持たせろよな……」

言い終えた途端にチャイムが鳴り、それと同時にアリスが大きな音とともに席を立ち、俺の前に来る。

しかしなんだろう、たった数秒前なのに態度がすごく変わっているような……

「OK, andiamo. Andiamo adesso. Andiamo in un istante」

「え、ちょ、校内でワープはまずいつて!」

瞬間俺の意識は暗転し、すぐに戻る。

「こ、これでワープ3回目……。め、目眩がする」

「Io avevo fame. Comunque, io non ho un pranzo oggi. Dove? che io posso comprare cibo?」

「意味分かん」

「オナカ、スイ、タ?」

これは普通に疑問形なのか?

それとも言葉がよく分からないから疑問形になってしまったのか?
これは捉え方がとても難しい……。

「おそらく後者ですよー」

「だろうな……」

うちの購買は広いからな。

制服の販売やクリーニングをしてくれるコーナーに、文具が一通りそろうコーナー、読みたい本が読めるコーナー、その他もろもろ。最早高校の購買というよりは小さなデパートの様なものだ。

実際、この学校は購買棟という建物ができていて、その大きさは勉強に使われるA棟、B棟等より広い。

「オナカスイタ!」

ぱあつと。

超絶まぶしく輝く笑顔を俺に見せつけ、何をしたいのかというほど俺の腕をきつく締める。

「分かった!分かったから手を放して!カップルと間違えられるぞ?」

「Non? buono? Particolarmente」

「よくなーい!」

お、俺もだんだんイタリア語分かるようになってきたか？
というかニュアンスで伝わるようになってきたな。

「つと……。俺和食で。こいつ洋食で」

「Grazie」

用意された物をもらって手近な席に座ると、両方とも「いただきます」とだけ言ってあとは黙々とそれを食べていた。

アリスは最初にちゃんとお祈りをしていたので、もしかしたら「食事中はしゃべらない」なんてルールがあるのかもしれない。
そんな風に思いながら、アリスの顔を見ていた。

アリスが食べているのはスパゲッティなのだが、なんというか、すごく上品に食べている。

俺なんかが同じ物食べるとどうしても麺をフォークですくって食べているようにしか見えないのだが、彼女は麺をフォークで上手く巻きあげ、それから口へと持っていく。

ふと食べる動作が止まった。

「Vuole mangiare, anche?」

「あ、ごめん。そんなつもりじゃ」

「Apra una bocca」

「え？あ……」

断ろうと開いた口にスパゲッティが巻かれたフォークが滑り込み、俺は反射的に口を閉じてしまった。

それは第三者から見ると誰が何と言おうと、その……「あーんして」というやつであって、そして俺はしかも俺は俺は俺は俺は俺は

はhhhhhh

案の定恥ずかしくなり、ボツとアスカは一気に顔を赤らめた。

「あ、あわわわ……」

「Oh, io sono bello」

「お、おお、おお前ははhh、sそ、そういうのh、はずかしくないのかよ？」

「Io non ho molto vergogna」

そんな、dだって、今のやつ、口に入れかけてたよな？しかもそれ以前に何口かすでに食べてたよね？こ、これって間接キスって奴じゃないの？

「アスカ……」

「っは！？」

ルナ！？

と後ろを向こうとするとグツと頭をつかまれる。

「る、ルナさん……？」

殺気、殺気、殺気がすごいですよー。

「アスカのバカ！そんなに食べさせてもらいたいなら私が……」

「え？」

「なんでもない！」

今度は正面でアリスがニヤリと笑ったような気がした。
背後ではルナが握った拳をぶつけるところがなくて困っていた。

「とりあえず隣もらうから」

そう言っ て空いている三つ目の席に着席した。

「ところでさあ、俺達次はいつ出勤になるのかな？」

「出勤って……、まあ、土日は訓練があるけど？」

「あ、そっか」

忘れていたわけではない。

実戦の方がスリリングで、爽快なのだ。

だから次はいつ魔物が現れるのかと、聞いたつもりだった。

現れなければ現れないほどいいはずなのに、俺は何を聞いているんだ……

15 Daily (後書き)

最近休んでてすいません！

少なめですがこれで・・・。

やっぱり戦闘の方が書いてて楽しい！

まあ、しばらくは書くとしたら日常系かなw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3907q/>

E.A. イラ.アフター

2011年10月8日16時06分発行